国語（六）目次

こくご　一―四
國語　第三學年上―第六學年下　（第六期　国定国語教科書）……五
こくご　一……七
こくご　二……二三
こくご　三……三八
こくご　四……六五
國語　第三學年　上……九四
國語　第三學年　下……一三
國語　第四學年　上……一五六
國語　第四學年　中……一八二
國語　第四學年　下……二一〇
國語　第五學年　上……二四五
國語　第五學年　中……二六八

⑩ 戦後

きれいな　はな。

あかい　はな、
あかい　はな。
きいろい　はな、
きいろい　はな。
みんな、
きれいな　はなです。
まるも、
はなを　みて　います。

まことさん　はなこさん

うみは　ほんとうに　きれいです。
おきには、さぜんが　はしって
います。
「あの　さぜんに　のりたいね。」
あきこさんが　いいました。
「うん、のりたいね。」
みんな　そう　いいました。
大きい　なみ、小さい　なみ。
青い　なみ、白い　なみ。
うみは　ほんとうに　きれいです。

いさむさんの　うち

ゆうやけ

ゆうがたに　なりました。
きんいろの　くも、
ばらいろの　くも。
「ゆうやけ　こやけ、
あした　てんきに　なあれ。」
ただおさんと　ゆりこさんと、
ふたりで　うたいました。
たんぼに　くもが　うつります。

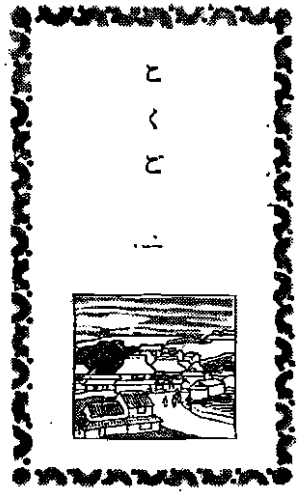
いなかの　いちにち

國語 第五學年 下……二九〇
國語 第六學年 上……三三〇
國語 第六學年 中……三三六
國語 第六學年 下……三六四
まことさん はなこさん
いなかの いちにち……三九九
いさむさん の うち
まことさん と はなこさん……四〇一
いなかの いちにち……四一〇
いさむさんの うち……四四〇
所収教科書解題……四六四
国語教科書総目録……四六九
国語教科書総解説……四四三

こくご 一—四

国語 第三学年上—第六学年下

（第六期 国定国語教科書）



こくご一　第一学年用用
Approved by Ministry of Education
(Date Nov. 17, 1947)

昭和二十二年二月二十日　新編発行
昭和二十二年十一月二十七日　修正印刷
昭和二十三年十二月二十五日　修正発行
（昭和二十二年十一月十七日　文部省検定済）

著作権所有　著作者兼発行者　文部省

東京都北区滝野川一丁目八五七番地
発行兼印刷者　東京書籍株式会社
代表者　長谷川　一

東京都北区堀船町一丁目八五七番地
印刷所　東京書籍株式会社

東京都北区堀船町一丁目八五七番地
製本所　東京製本株式会社

（昭和二十三年度用第一次発行）

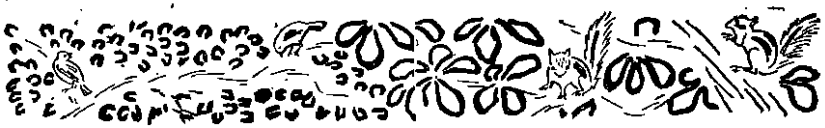
凡例

一、本書は文部省著作、昭和二十二年二月より九月までに発行された版本によった。

一、さし絵の一部は色刷となっているが、本書ではすべて黒で印刷した。色刷は口絵参照。

一、本書では原本の文字を二段組みとした。原本にある各巻の目次の頁数は省略した。原本のさし絵はすべて縮小して本文の近いところに入れた。

一、文字、表記法、巻末抽出文字はすべて原本のままとした。字体はなるべく本文に近い活字を用いた。



こくご　一

一　もくろく
二　みんな　いい　こ
三　なのはな
四　むすんで　ひらいて、
五　たまいれ
六　かくれんぼ
七　もちもの
八　よみかき
九　あさの　こくばん
十　ゆうやけ　こやけ
十一　ゆうぎ
十二　あいさつ
十三　人の　かお
十四　手と　足
十五　ひとつの　ことばから
十六　なって　みたい　もの
十七　だんだん　くわしく　なる
十八　山の　つつじ
　　お月さんの　くに

一　みんな　いい　こ

おはなを　かざる、
みんな　いい　こ。

きれいな　ことば、
みんな　いい　こ。

なかよし　こよし、
みんな　いい　こ。

十四　ひとつの　ことばから

お日さまと　いう　ひとつの　ことばから、おもいだした　ことばを、つぎつぎと　かいて　みました。

ただおさんの　かいた　ことば。

お日さま――おつきさま――おほしさま――くも――かぜ――あめ――ゆき――きた――みなみ――にし――ひがし――

みちこさんの　かいた　ことば。

お日さま――おかあさん――かがみ――くし――手ぬぐい――ふきん――おへや――なか――そと――

まことさんの　かいた　ことば。

お日さま――にじ――あか――あお――きいろ――まる――四かく――三かく――

よしこさんの　かいた　ことば。

お日さま――はな――ことり――とぶ――なく――とまる――かくれる――

十五　なって　みたい　もの

「なににでも　なる　ことが　できるなら、ただおさんは、なにに　なって　みたいと　おもいますか。」

「かぜに　なります。」

「なぜ、かぜに　なりたいと　おもいますか。」

「かぜに　なって、　どこでも　どんどん　ふきまわって　みたいのです。」

「みちこさんは　なにに　なりますか。」

「わたくしは　はなに　なります。」

「その　わけは。」

「きれいな　はなに　なって、おへやを　かざりたいからです。」

「まことさんは。」

「うみに　なります。」

「どうして。」

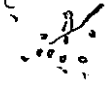
「うみに　なって、せかいじゅうの　おふねを　うかべたいからです。」

「よしこさんは。」

「ことりに　なります。」

「それは　なぜですか。」

「たかい　木に　とまって、うたを　うたいたいからです。」



十六　だんだん　くわしく　なる

かぜが　ふきます。

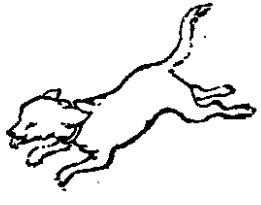
かぜが　そよそよと　ふきます。

あさかぜが、そよそよと　のはらを　ふきます。

川が　ながれて　います。

川が、さらさらと　ながれて　います。

ちいさな　川が、　うちの　まえを　さらさらと　ながれて　います。



いぬが　はしって　きます。

しろい　いぬが　はしって　きます。

しろい　こいぬが、むこうから　ころげるように　はしって　きます。

あさがおの　はなが　さきました。

あさがおの　はなが　いつつ　さきました。

うすももいろの　あさがおの　はなが、いつつ　かきねに　さきました。

ゆめを　みました。

ゆうべ、おもしろい　ゆめを　みました。

ゆうべ、おとうさんと　きしゃに　のって、お月さんの　ところへ　いった　ゆめを　みました。

十七　山の　つつじ

山の　つつじが　さいた。

まっかな　つつじが　いっぱい。

かっこうが　ないてる。

「かっこう。」

「かっこう。」

つつじから　ないてる。

「かっこう。」

「かっこう。」

「おかあさん、どこ。」
と　いう、さちこの　声が　します。
「ここですよ、さちこさん。」
さちこが、おかあさんの　そばに　かけよります。
大きな　りんごを、おかあさんに　あげます。
おかあさんは、本を　おいて、りんごを　手に　うけとります。
けれども、また　さちこに、りんごを　かえします。さちこは、またおかあさんに　あげます。
とうとう、おかあさんは、さちこから　りんごを　もらいます。
「この　りんご、じろうにいさんに　いただいたの。」
こういって、さちこは、じろうを　手まねき　します。
じろうが、走って　でて　きます。
「ああ、その　りんご、いちろうにいさんから　もらったのです。」
こう　いって、いちろうを　よびます。
いちろうが、走って　でて　きます。
おかあさんの　よこに、三人が　立ちます。おかあさんは、三人の　あたまを、しずかに　なでて　やります。

八　ゆめと　つくえ

（一）

ゆうべ、ねどこに　はいってから、こんな　ことを　かんがえました。
わたくしには、おとうさんも　あります。おじいさんもあります。けれども、おじいさんの　おとうさんは、おいでに　なりません。いまは　おいでに　なりませんが、まえには　おいでに　なったに　ちがい　ありません。
それは、どんな　かただったでしょう。
こんな　ことを　かんがえている　うちに、いつの　まにか、ねむって　しまいました。
ゆめに、ひろい　のはらを　みました。
なの花が、いちめんに　さいていました。
ちょうちょも　とんで　いました。
わたくしは、「みんな　いい　こ」を　うたいながら、あるいて　いきました。

そこへ、ひとりの　おじいさんが　でて　きました。みると、わたくしの　おじいさんに　よく　にた　かたでした。
わたくしは、おもわず、
「おじいさん。」
と　いいますと、そのかたは、
「わたくしは、おまえの　おじいさんの　おとうさんだよ。」
と　いって、にこにこ　なさいました。

（二）

先生が、こんな　おはなしを　なさいました。
「みなさんの　つかって　いる　つくえも、こしかけも、長い　あいだ　はたらいて　きました。
二年生も、これで　べんきょうを　しました。三年生も、これで　べんきょうしました。
四年の　人たちも、五年の　人たちも、六年の　人たちも、その　まえの　人たちも、これを　つかいました。」

ここまで　おはなしを　きいた　とき、わたくしは、ふと、ゆうべの　ゆめを　おもいだしました。
先生は、つづけて　おっしゃいました。
「こんど、みなさんが　二年生に　なったら、あたらしい　一年生が　はいって　きます。そうして、これを　つかいますよ。ですから、この　つくえや　こしかけを、かわいがって　やりましょうね。」

九　春を　むかえに

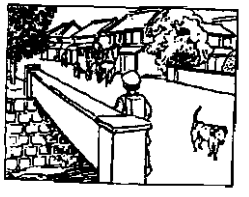
これは　よびかけです。みんなで　かんがえて、やりましょう。

（一）

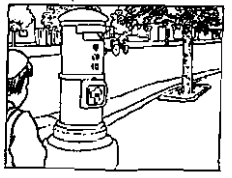
「さあ、春を　むかえに　でかけましょう。」
「みんな　でかけましょう。」
「みんな　のりましたか。」
「のりました。」
「ぽちさんは　のりましたか。」
「わんわん、わんわん。」
「みけちゃんは。」
「にゃお、にゃお、にゃお。」
「からすさんは。」

十一　みんなの　もの

この　はしは　みんなの　ものです。
ばしゃも　とおります。
じどうしゃも　とおります。
いぬも　走って　いきます。
わたくしは　学校へ　いく　ときと、
かえる　ときに　ここを　とおります。



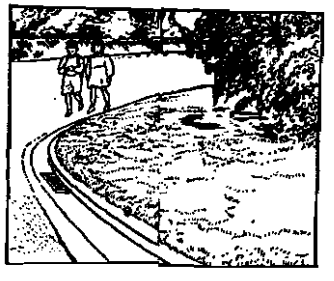
この　はしが　なかったら　どう
しましょう。



この　ポストも　みんなの　ものです。うちの　人の　かいた　てがみや
はがきを、ここに　いれます。
きんじょの　人たちも　この　ポストに　いれます。
くさを　ちぎって　いれたり、かみきれを　いれたり
する　小さな　子が　いたら、とめて　やりましょう。

こうえんに　さいた　きれいな　花は、みんなの　心を
たのしませて　くれます。
「花を　おらないで　ください。みに　きた　人が　一本
ずつ　おって　しまえば、いまに　みんな　なくなって
しまうでしょう。どうぞ　おらないで　ください。」

この　ていしゃばも　みんなの　ものです。
この　でんしゃも　みんなの　ものです。
ここの　しばふも　みんなの　ものです。



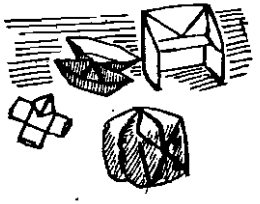
やわらかな　もうせんを　しいたような　しばふ、みど
り色に　つやつやと　光った　しばふ。
「よごさずに　かわいがって　ください。」

お月さまも　みんなの　もの。
あの　まっ白な　雲も　みんなの　もの。
よるの　ほしも、あさの　風も、みんなの　ものです。

十二　一まいの　紙

一まいの　紙で、いろいろな　ものを　おる　ことが
できます。
ふねを　おる　ことも　できます。ピアノや　ふくすけ

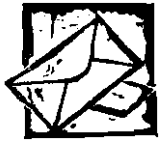
をおる　ことも　できます。きつねや、だましぶねや、紙ふうせんなども
おる　ことが　できます。
この　一まいの　紙が、いろいろな
かたちに　なったり、ふくれたり、立
つたりします。

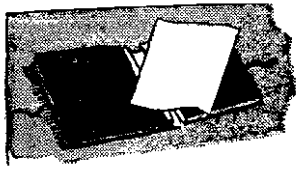


この　一まいの　紙に、えを　かく　こと
が　できます。
おとうさんの　かおも、先生の　つくえも　かく　こと
が　できます。
にわの　花も、空の　雲も、とおい　山も、ちかい　家
も、かく　ことが　できます。
クレヨンで　かく　ことも　できます。えんぴつで　か
く　ことも、ふでで　かく　ことも　できます。

また、この　一まいの　紙に、字を　か
く　ことが　できます。
大きな　字でも、小さな　字でも、かく
ことが　できます。
はやく　かく　ことも、ゆっくり　かく　ことも　でき
ます。

ひらがなを　かく　ことも、かたかな
を　かく　ことも　できます。かん字を
かく　ことも　できます。ローマ字を
かく　ことも　できます。
心に　思った　ことは、いつの　まに
か　きえて　しまいますが、紙に　かい
た　ものは、いつまでも　のこります。
口で　はなした　ことは、そのまま
きえて　なくなりますが、紙に　かいた
つまでも　のこります。

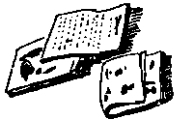




おはなしは、い

一まいの　紙に　かいた　えを、どこに　かざりましょ
う。
紙に　かいた　字を、どこへ　おくって　あげましょう。
どんな　とおい　ところでも、紙は、字や　えを　はこ
んで　くれます。

先生が、
「みなさんの　かいた　えでも、字でも、だ
いじに　しまって　おきなさい。みなさん



三
どくこ

いた　けむりが、山の　上から　いつまでも　いつまでも
たちのぼって　いました。
それで、この　山の　名を、「ふじの　山」と　いうよ
うに　なりました。

ア	カ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ヤ	ラ	ワ
イ	キ	シ	チ	ニ	ヒ	ミ	イ	リ	ヰ
ウ	ク	ス	ツ	ヌ	フ	ム	ユ	ル	ウ
エ	ケ	セ	テ	ネ	ヘ	メ	エ	レ	ヱ
オ	コ	ソ	ト	ノ	ホ	モ	ヨ	ロ	ヲ

ン

ガ	ザ	ダ	バ	パ	キャ	シャ	チャ	ニャ	ヒャ	ミャ	リャ	ギャ	ジャ	ヂャ	ビャ	ピャ
ギ	ジ	ヂ	ビ	ピ	キュ	シュ	チュ	ニュ	ヒュ	ミュ	リュ	ギュ	ジュ	ヂュ	ビュ	ピュ
グ	ズ	ヅ	ブ	プ	キョ	ショ	チョ	ニョ	ヒョ	ミョ	リョ	ギョ	ジョ	ヂョ	ビョ	ピョ
ゲ	ゼ	デ	ベ	ペ												
ゴ	ゾ	ド	ボ	ポ												

光	白	東	西	南	北	鳥	心	王
門	名	虫	魚	海	方	村	米	切
百	早	麦	作	文	右	左	火	道
島	思	多	石	夜	子	男	女	風
雲	家	雨	音	紙	字	世	界	力
天	戸							

こくご　四

もくろく

一　この　町
二　にわとり
三　いろいろな　あいて
四　心に　生きて　いる　ことば
五　がんの　なかま
六　ことばあそび
七　いろはがるた
八　クリスマス
九　雪
十　うらしまたろう
十一　一つの　ものでも
十二　四　季
十三　はごろも

7

二　にわとり

にわとりが、かぶの　はっぱを
たべて　いる。
風が　ふくと、にわとりが　ふわ
ふわ　ふくれる。

むこうぎしの、すすきの　もさも
さして　いる　ところから、小鳥が
とびたった。
「みんな、しずかに――よしきりが　なくから。」
みんな　じっと　して　いたけれども、なかなかった。

かくれんぼしたら、わたしが　おにに　なった。
みんな、鳥ごやに　かくれて　いた。
たまごを　生んで　いるのを　みて　いた。

えつ子が　わたしの　せなかで　ねんねした。
わたしの　せなかに　かおを　つけて　ねんねした。
おかしを、しっかり　手に　もって　ねんねした。
せなかが　ほかほか　あたたかい。

ゆうがた　水くみに　でた。
おかあさんが、月に　てらされて、水を　くむ。
くろい　かげが　できてる。
おかあさんの　バケツが　おもそうだ。

バケツの　中に　月が　うつって
いる。

お星さん、よく　光るね。
わたしが　手ぬぐいを　もって、
おふろへ　いくのが　みえるの。

学校から　かえったら、おかあさんが、石うすを　ひいて　いらっしゃった。すぐ　てつだった。おかあさんの　手の　上に　つかまって、ひいた。石うすは、ゴロン　ゴロンと　いった。

おかあさんに、
「ぼくが　いっしょに　ひくと、かる
く　なるかしら。」

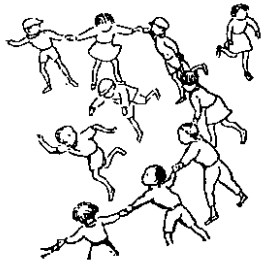
と　きいたら、
「ああ、かるいよ。」
と　おっしゃった。そこで、おかあさんの　手の　上で、
力いっぱい　ひいた。

三　いろいろな　あいて

「文を　書く　ことは、お話を　するのと　おなじ　ことです。
お話が　あいて　なしには　できないように、文も　あいて　なしには　書ける　ものでは　ありません。」
先生が　こう　おっしゃったので、みんなは　それぞれあいての　人を　きめてから、文を　書きました。

まさおさんは、あいての　人を「おかあさん」に　きめて、つぎのような　文を　書きました。
「さっき、みんなと　ねとねずみを　して　あそびました。みんなで　手を　つないで、わを　つくりました。ねずみが　三びき、わの　中に　はいり、ねこが　二ひき、わの　そとに　でました。ねこの　一ぴきは、わたくしです。
先生が、
『さあ、用意は　いいですか。』
と　おっしゃいました。みんなは、
『はい、いいです。』
と　こたえました。

ねこの　わたくしは、どのねずみを　つかまえようかと考えました。ねずみたちは、わの　中で　きょろきょろして　います。わたくしは、ただしさんを　ねらって、わの　中へ　もぐりこもうとしました。みんなは、「きゃっ。」と　いって　しゃがみます。あちこち　まわって　いる　うちに、ぴょいと　中に　はいりました。ねずみたちは、あわてて　わの　そとへ　にげました。すると、そとに　いた　ねこが　おいかけました。もう　すこしで　つかまりそうに　なった　とき、また　わの　中ににげこみました。そこを、わたくしが　うまく　つかまえました。」



たつおさんは、「にいさん」にあてて　文を　書きました。
「きのう　えを　かきました。なんの　えか、あてて　ごらんなさい。ぼくの　うちを　かいたのです。
やねも、かべも、はしらも　かきました。まども　かき

『ぼっちゃん、あなたもおかけなさいな。』
といって、せきをすとしあけてくれました。
けれども、
『ぼくは、もう大きいんですから。』
といって、とうとうかけなかったの。」
「それでうれしかったのね。」
「ええ、はじめは、電車の中は、まるでにらめっこをしているようだったのに、それからは、みんなにとにとして、友だちのようになかよくなってきました。ほんとうは、それでうれしかったんですよ。」

はるこさん

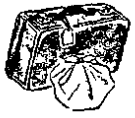
はるこさんも、にこにこして帰ってきました。駅の出口までくると、でむかえにきていたおねえさんをみつけました。
「おねえさん、ありがとう。」
「お帰り。」
それから、はるこさんは、きっぷを改さつの女の人にわたしながら、
「ありがとうございました。」
といって、かるくあたまをさげて、そとをでました。
「はるこさん、いま改さつの人にありがとうっていったのは、どういうわけ。」

「だって、電車のおかげで、あんな遠いところまで、一日でいって帰ってきたのですもの、どこかでありがとうといいたいと思ったけれど、いうところがなかったものだから、それであの人にいったのよ。」
「でも、あのかた、わかったかしら。」
「いそがしいから、わからなかったかもしれません。でもいいの。」

しんきちくん

しんきちくんは、電車をおりてから、元氣にあるいて帰りました。
「ただいま。」
「しんきちか、早かったね。」
しんきちくんのおとうさんは、店でそろばんをはじいていました。
「ぼく、きょう、とてもうれしいんです。」
「どうしたのだね。」
「ぼく、こんな本をもらいました。」
「先生からかい。」
「いいえ、むこうの店に品物をとどけて、受けとりをもらって帰ってくるとちゅう、よその人からもらったんです。」
「まあ、受けとりをおみせ。——よしよし。それから、う

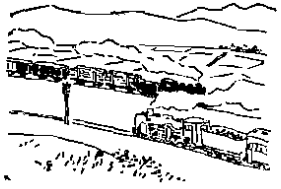
れしかったというのはどんなことかね。」
「それはこうなんです。店をでてすこしくると、どこかのおじさんが、荷物を二つ持って、あせをふきふきあるいていました。一つは大きくて、ぼくなんかに、とても持てそうもない物、一つは小さくてかるそうな物です。
そこで、ぼくは、
『おじさん、駅へおいでになるのでしょう。ついでですから、一つ持っていってあげましょう。』
といいました。



『ありがとう。しかし、きみは小さいから、まあいいよ。』
『だいじょうぶです。ぼくにも持てそうですから。』
といって、小さいほうの荷物を　わたしてもらいました。その荷物は小さいわりに、なかなかおもかったのですが、ぼくは、かたへのせて持っていきました。駅につくと、その人は、
『ありがとう、ありがとう。ほんとうにすまなかったね。きみは　ときどき　こういうことをやるのかね。』
ときいたので、ぼくは、
『いいえ、はじめてです。まえからも、やりたいと思っていましたが、なかなかできなかったのです。ぼくにはずいぶんおもかったんですが、はじめてです。これからも、いつもやりたいと思います。』
といいました。すると、その人は、トランクからこの本をだして、
『これには、きみのようないい子どものことが書いてありますよ。』
といって、ぼくにくれました。
それで、ほんとうにうれしいんです。」

四　石炭

「シュッシュッ、ポッポ、シュッシュッ、ポッポ——
汽車が走っています。まっ黒なけむりをもうもうとはいて、どんどん走っています、おや、むこうからも、長い長い貨物列車がやってきます。材木や、石炭や、お米などを、たくさんつんでいるのです。
この汽車は、なにをたいて走っているのでしょう。



○
これは貨物船です。かんばんのクレーンが、あがったり

大よろこびで、声をあわせてうたいました。

旅のひわが、

「きみも、いっしょにむこうへとんでいこうよ。空はひろくておもしろいよ。」

といいました。

「ありがとう。ぼくはおともができないのさ。」

「どうして。」

「ほら、羽がだめだから。とうしていつまでも、ここにいるよりしかたがないのさ。」

「ここにいて、なにか、おもしろいことがあるのかい。」

「いろいろあるよ。」

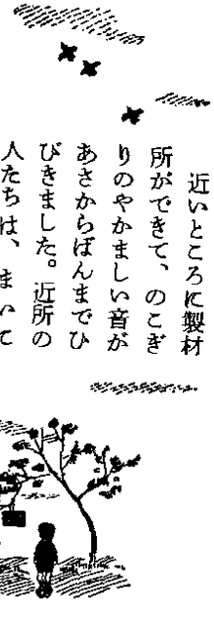
そういって、ハーモニカのまねや、さんちゃんの本をよむまねなどを、つぎからつぎへときかせました。

そこへ、さんちゃんが学校から帰ってきました。旅のひわは、おどろいて、すぐにまつの木の上へにげていきましたが、かごのひわは、大よろこびで、「チュイン、チュイン。」をはじめました。

「きみ、きみ。おりてこないかい。ぼくの友だちのさんちゃんだよ。ちっともこわいことはないから、いっしょにあそぼうよ。」

かごの中のひわはなかまをよびました。

けれども、旅のひわは、そのままとんでいってしまいました。



近いところに製材所ができて、のこぎりのやかましい音があさからばんまでひびきました。近所の人たちは、まいにち、こまった、こまったといっていました。しかし、ひわは、すぐに、

「チュイン、チュイン、チュイン。リリリン、リーン、リーン。チュイン、チュイン、チュイン、リリリンリーン。」

と、まねをしました。

「小鳥でも感心なものだ、新しいことをどんどんおぼえていく。」

おとうさんのほめるのをきいて、さんちゃんは、ますますひわがかわいくなりました。

草　土　電　野　汽　船　荷　私　旅
改　乗　労・明　配　駅　遠　近　動
終　点　帰　店　物　受　持　炭　貨
材　茶　工　場　送　美　岸　田　屋
平　和　通　鳴　身　分　今　写　金
住　新　週　間　入　級　記　時　教
室　流　葉　念　員　運　語　死　感
製　所

国語　第三学年　下

一　もくろく
二　小さなねじ
　　イソップものがたり
　　ありとはと
　　ありときりぎりす
三　かかし
四　空のうた
五　月と雲
六　かべ新聞
七　だれの力
八　つりばりのゆくえ
九　ぼくの発見
　　（一）
　　（二）
十　たこ
十一　うさぎさん

10

大よろこびで、声をあわせてうたいました。

旅のひわが、

「きみも、いっしょにむこうへとんでいこうよ。空はひろくておもしろいよ。」

といいました。

「ありがとう。ぼくはおともができないのさ。」

「どうして。」

「ほら、羽がだめだから。こうしていつまでも、ここにいるよりしかたがないのさ。」

「ここにいて、なにか、おもしろいことがあるのかい。」

「いろいろあるよ。」

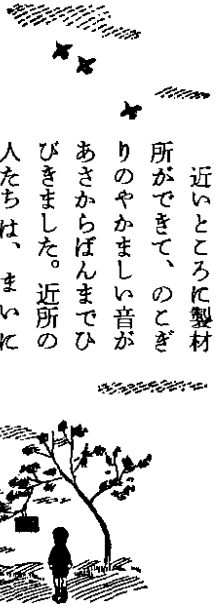
そういって、ハーモニカのまねや、さんちゃんの本をよむまねなどを、つぎからつぎへときかせました。

そこへ、さんちゃんが学校から帰ってきました。旅のひわは、おどろいて、すぐにまつの木の上へにげていきましたが、かごのひわは、大よろこびで、「チュイン、チュイン。」をはじめました。

「きみ、きみ。おりてこないかい。ぼくの友だちのさんちゃんだよ。ちっともこわいことはないから、いっしょにあそぼうよ。」

かごの中のひわはなかまをよびました。

けれども、旅のひわは、そのままとんでいってしまいました。



近いところに製材所ができて、のこぎりのやかましい音があさからばんまでひびきました。近所の人たちは、まいにち、こまったこまったといっていました。しかし、ひわは、すぐに、

「チュイン、チュイン、チュイン。リリリン、リーン、リーン。チュイン、チュイン、リリリンリーン。」

と、まねをしました。

「小鳥でも感心なものだ、新しいことをどんどんおぼえていく。」

おとうさんのほめるのをきいて、さんちゃんは、ますますひわがかわいくなりました。

草土電野汽船荷私旅
改乗労・明配駅遠近動
終点帰店物受持炭貨
材茶工場送美岸田屋
平和通鳴身分今写金
住新週間入級記時教
室流葉念眞運語死感
製所

国語　第三学年　下

一　もくろく
二　小さなねじ
　　イソップものがたり
　　ありとはと
　　ありときりぎりす
三　かかし
四　空のうた
五　月と雲
六　かべ新聞
七　だれの力
八　つりばりのゆくえ
九　ぼくの発見
　　（一）
　　（二）
十　たこ
十一　うさぎさん

なアイウエオ、カキクケコ――という五十音の中で、ナニヌネノという一ぎょうの中にはいっている音ばかりではないか。ただ一つ「ヌ」という音がぬけているだけである。

そこで、あらためて声をだして「ヌ」といってみた。

これもはなから声がぬけているようだ。ねんのために、はなをつまんで、「ヌ」といおうとしたら、じつに苦しい。そうすると、ナニヌネノという一ぎょうは、ぜんぶはなの音でできていることがわかった。

このほかに、弟は「ミ、」「ム」がいえなかった。この二つは、両方とも、マミムメモという一ぎょうの中にはいっている。ここで、もしやと思って、はなをつまんで「マ、」「メ、」「モ」といってみたら、これらもはなの音であることがわかった。そうして、こんどは、アイウエオ、カキクケコから、じゅんじゅんにいってみたところが、ふしぎふしぎ、はなからでる音は、ナニヌネノ、マミムメモの二ぎょうだけで、あとは、おしまいのパピプペポ、パピプペポにいたるまで、みんなはなから声のでる音ではないことがわかった。

ぼくは、五十音というものは、一年生のときにならったからよく知っているが、いままでは、「ちがったかなをならべたもの」ぐらいに思って、それ以上ふかく考えてみたことはなかった。それがいま、一つ一つの音の性質を考えたうえで作ったものであることがわかって、びっくりしてしまった。カキクケコでも、サシスセソでも、かんたんにはわからないが、一ぎょう一ぎょうは、なにか、ほかのぎょうとはちがった性質をもっているにちがいない。

ぼくは、こう考えると、弟のまねをしてみんなをわらわせてやろうなどという氣持は、どこかへふっとんでしまった。それよりも、五十音について、新しく思いついたことをみんなに話して、びっくりさせてやろうと考えたからである。

十　たこ

おじさんからたこをいただきました。ま四角で、ほねが二本しかついていないたこです。

はじめてあげにいったときに、みんなが、

「へんなたこだな。こんなものがあがるものか。」

といってわらいました。けれども、あげてみると、なかなかよくあがりました。だれのたこよりもよくあがりました。わる口をいったものも、

「やあ、よくあがる。ふしぎだなあ。」

といって感心しました。

ただしちゃんが、そばから、

「ちょっと糸を持たせて。」

といいました。ただしちゃんは、がい地からひきあげてきた子で、來年小学校へあがります。糸を持ったただしちゃんは、

「よくひっぱるな。」

といってにこにこしました。たこが青空で右や左にゆれると、自分もいっしょに首をふりながら、しっかり糸をにぎっています。

「こんなたこ、ほしいなあ。」

と、ただしちゃんがいいました。ほんとうにほしそうな口ぶりなので、

「作ってあげようか。」

といいますと、ただしちゃんは喜んで、

「うん、作って。」

と、元氣のいい声でいいました。

たろうさんが、わきから、

「きみ、作れるかい。」

とききました。

「作れるさ。」

と答えましたが、ほんとうは、たこを作るのははじめてです。けれども、いっしょうけんめいに作ったら、できないことはないだろうと思いました。

うちへ帰って、そのたこをみて、作りかたを考えてみました。材料は、ま四角な紙と、ほねにするほそい竹二本と、それに、たこ糸やのりなどです。紙は半紙でいいし、ほねは工作のあまりのひごでまにあわせました。のりは、ごはんつぶをよくねると、いいのりができました。

はじめに半紙をま四角に切りました。なが四角から、ま四角に切る切りかたは、いつかおかあさんに教えていただきましたから、うまくできました。

「なんの絵をかこうか。」と、いろいろ考えましたが、ただしちゃんのわらい顔をかくことにしました。

クレヨンで色をつけ、バックをむらさき色にぬりつぶしたら、ただしちゃんの顔が、生き生きとうきあがってきました。

つぎにほねのとりつけです。ほねは、たてぼねとよこぼねの二本です。まず、たてぼねからはじめました。紙のうらには、まん中に、ま四角に切ったときにつけたすじ

12

がたてについています。そのすじにあわせてひごを切り、小さな紙で上と下とまん中をはりつけました。

それから、よこぼね。よこぼねはまっすぐではなく、上へゆみなりにまげるのですから、めんどうでした。じっさいに紙の上でいろいろいろとまげぐあいをしらべ、ちょうどいい長さにひごを切りました。はりつけるのも、まがっているのでめんどうでしたが、いろいろにくふうして、はりつけました。

やっとできたので、おかってにいらっしゃるおかあさんのところへとんでいって、

「やっとできましたよ。」

といっておみせしました。おかあさんは、

「まあ、よくできましたね。」

と、ほめてくださいました。

「これ、ただしちゃんにあげるの。」

「ただしちゃん、大喜びでしょう。でも、のりがかわかないうちにあまりいじると、すぐはがれますよ。そうっとかわかしておおきなさい。」

ぼくは、だいじに本ばこの上にのせておきました。

「早くかわくといいな。かわいたら、糸目をつけて、ただしちゃんのところへ持っていってあげるんだ。」

ぼくは、うれしくてたまりませんでした。

十一　うさぎさん

五ひきのうさぎさんがいました。

ある日のこと、五ひきのうさぎさんは、まつ林の中で、まつかさで、まりなげをしたり、フットボールをしたりして遊びました。

そこへ、おさるさんがやってきました。

「うさぎさん、そのまつかさをくれないか。」

うさぎさんたちは、おさるさんにみんなまつかさをあげようと、話しあいました。

「あげるよ。お受けなさい。」

うさぎさんたちは、まつかさを一つ一つ、ぽんぽんとおさるさんになげてやりました。

おさるさんは、きょろきょろしながら、まつかさを受けとりました。

うさぎさんたちは、くるみの木の下で遊びました。そこには、くるみの実が、ころころと落ちていました。

うさぎさんは、くるみをひろって、石でわってたべることにしました。

「このくるみを持っていって、山のてっぺんでたべよう。」

そういいながら、カチン、カチンとわっていると、そこへちょろちょろと、りすさんがきました。

「うさぎさん、なにしているの。」

「くるみをわっているんだよ。」

「かたくて、うまくわれないだろう。」

「石でたたいて、わっているのさ。」

「たくさんとれたね。ぼくにもちょうだい。ぼく、くるみだいすきなんだ。」

「りすさんは、くるみがだいすきだそうだから、あげようか。」

「あげよう。」

「りすさん、さ、あげるよ。おあがり。」

りすさんは、両手に、くるみをにぎって、おいしそうにたべました。

「こんどは、なにをしようか。」

「あなをほって、トンネルをこしらえて遊ぼうよ。」

「トンネルか。それはおもしろい。」

五ひきのうさぎさんたちは、めいめいにあなをほりはじめました。

まえ足でほっては、うしろ足で土をはじきだしました。あなはずんずん長くなっていきました。

「そっちのあなと、とっちのあなとつづけようか。」

「つづけよう。」

トンネルはだんだん深くなり、廣くなりました。

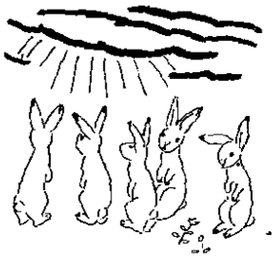
「ここで、かくれんぼしよう。」

「しよう、しよう。」

「じゃんけんぽん。」

「あいこでしょ。」

13



みつばちさんがとんできて、「うさぎさん、ここは、しずかなところですよ。安心して、ゆっくりおあがりなさい。」と、うたいながらいいました。

五ひきのうさぎさんたちは、みつばちさんのことばを、たいへんありがたく思いました。

決	首	飛	面	谷	集	畫	顔	助	鉄
勝	料	機	病	妹	相	遊	向	樂	計
負	実	勉	見	命	談	両	根	会	台
岩	落	強	古	息	溫	聞	地	合	具
肉	深	以	望	問	度	來	森	唱	役
	廣	性	鏡	同	銀	行	朝	隊	喜
	毛	質	画	願	答	第	寒	夕	活
	追	角	柱	神	題	号	絵	毎	歩

国語　第四学年　上

もくろく

一　校門のかしの木
二　手ということば
三　もんしろちょう
　（一）
　（二）
　（三）
　（四）
　（五）
四　汽車の中
　（一）
　（二）
五　作文
　（一）
　（二）
　（三）
六　月明かり
七　にげたらくだ
　一の場面
　二の場面
八　うさぎ日記

一　校門のかしの木

夜明けの風が流れてくる。中庭のキャベツが、なたねが、やぎ小屋が、ぼうっとあらわれる。どこかで小鳥が鳴いた。チチ、チチ、ピークイ、ピークイ　チチ、チチ。教室のまどは、まだねむりがふかい。

校門のかしの木は、目をさまして、しずかにしんこきゅうをした。

「さあ、きょう、いちばんはじめにくるのは、だれかな。」

かしの木は、子どもたちのことを、まず思いうかべる。

「あの白いブラウスの女の子かな、かばんをカチャカチャ鳴らして、走ってくる男の子かな。」

朝日の光がななめにさしてきた。校舎の半分が光った。校庭のつゆもいっぺんに光った。白いちょうが、ういたりしずんだりしながら、光の中をおよいでいたが、こんどは、思いきり高くとんで、屋根をこえて、うすべに色の空にきえた。

「きたきた。やっぱりあの男の子だった。きょうは、ぼうしをかぶっているな。赤い運動ぼうだ。」

かばんをカチャカチャ鳴らして、げたばこのかげにかくれた。つぎからつぎへと、子どもたちがやってくる。学校じゅうは、いちどに花がさいたようだ。あちこちのまどがあいて、教室も目がさめた。わらい声がはじける。オルガンがひびく。

カラン、カラン、カラン。おけいこがはじまった。

「はい。」「はい。」「はい。」

「先生。」「先生。」

えんどうの花が、風もないのにゆれている。

「もう帰る子がある。一年生だ。手をつないで校門をでていく子ども、かたを組んで話しながらでていく子ども、ならったばかりの唱歌を、大きな声で歌っていく子ども、なんども手をふりながら、先生にさようならをして走って帰る子ども。

一どでいいから、風になりたい。風になったら、学校の中を、ちょっとひとまわりするのだ。ろうかをすうっと通ってみたり、かいだんをトントンあがってみたり、こうどうをのぞいてみたり、みんなが勉強する教室にはいって、こしかけてみたり——」

14

かしの木は、きょうもそんなことを考えた。

そうじがはじまった。ろうかをとおる足音がきこえる。バケツの音もする。水の音もする。学校のにおいがしてくる。

しおがひくように、子どもたちが、さっと、学校からいなくなってしまった。教室のまどは、どこもまぶたをとじる。すずめが、ときどき、チュンチュンと鳴く。その声が校庭にひびきわたる。

やぎが、つまらなそうに、夕やけの空をながめている。

しゅくちょく室にひがともった。白いカーテンが黄色くみえる。そこからラジオがきこえてくる。

星のちらばった青い夜空は、子どものクレヨン画と同じだ。

「わたしをうえてくれた卒業生たちは、どこにどうしているだろう。もう、四十五年にもなる。あの日からきょうまで、わたしのみたこと、きいたことを話したら、いくつあるだろう。アラビアンナイトのように、いろいろな話がある。春には春の話、秋には秋のものがたり。なん百人の子どもの顔、なん千人の子どもの心。毎年、新しく入学した子どもたちが、わたしのそばへやってきた。毎年、新しい卒年業生たちが、わたしのそばからさっていった。」

おぼろ月が空にかかっている。さくらの花が、白くうかんでみえる。

「わたしもりは、わたし船に子どもが乗ると、こっちの岸から向こうの岸へ、船をこいでいく。わたし終ると、またひき返して、新しい子どもを乗せ、向こう岸へ運ぶ。先生のおしごとは、わたしもりのようなものだ。」

しゅくちょく室のひがきえた。夜つゆがおりてきた。

かしの木は、あくびを一つして、しめっぽくなった葉をふるわせ、それから、ねむりにおちていった。

二　手ということば

「手がよごれていますよ。」

「手がつけられません。」

「手がたりない。」

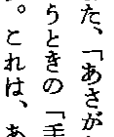
同じ「手」ということばにも、いろいろなつかいかたがあります。

じょうずなできばえをみたとき、感心して、思わず手をたたきます。

このときの「手」は、てのひらをさしています。「手をうつ」の「手」も、「手をあわせる」の「手」も、これと

同じつかいかたです。

ところが、「かどの手」とか、「なべの手」となると、人の手ではありません。これは、持つところということになります。



また、「あさがおに手をやりましょう。」というときの「手」は、またすこしちがいます。これは、あさがおのつるがまきつくように立ててある、竹や木のことをいうのです。

「きゅうりの手」や「まめの手」なども、同じです。

「手ならいをはじめましょう。」

「だいぶ手があがった。」

このときの「手」は、文字を書くことをさしていますが、どうして、「手」ということばが、文字を書くことになってきたのでしょう。

「手をつくす。」

「いますこし、手をいれてみよう。」

「新しく手をつけた。」

このようなときの「手」は、どんないみにつかわれているのでしょう。

それとよくにたつかいかたで、「まいの手」といったり、「この手でやってみよう。」とかいったりします。

私どもの手が、さまざまなはたらきをするように、「手」ということばも、さまざまなはたらきをしてくれます。

つぎの「手」は、どんなつかいかたでしょうか。

「ゆく手に、まつの木が立っています。」

「すばらしいものを手にいれたね。」

「そんなに、手をやかせるな。」

「ちょっと、手にあまるしごとだな。」

「手にとるようによくわかる。」

同じことばで、ちがったつかいかたがあるのは、「手」だけではありません。

「はらがいたみだした。」

「はらをたてるな。」

「はらに思っていることと、いうこととが、ちがう人がある。」

「はらをかかえてわらった。」

「はらのすわった人だな。」

これは、「はら」ということばを、いろいろにつかったばあいを、しめしたものです。

「はなが高い。」「はなをならす。」

「口をだすな。」「口ごたえする。」

「はがゆい。」「はがたたない。」

私たちのからだの名まえに、このような、いろいろなつ

だ。」

そういって、水の中にとびこみ、はくちょうのほうへおよいでいった。

はくちょうはあひるの子をみた。そして、はねをひろげてゆったりと近づいてきた。

「――」

かわいそうにあひるの子は、ころされるものと思いながら、水の上に頭をたれた。そのとたん、すみきった水の上に自分のすがたのうつっているのをみた。それは、ぶかっこうなみっともないあひるの子ではなかった。はくちょうであった。

生まれがはくちょうのたまごであってみれば、あひるの小屋に生まれてもさしつかえはない。はくちょうは、その受けてきたまずしさとふしあわせとをかえって喜んだ。いまは、その身をとりまくりっぱなものの中に、しみじみと幸福をさとったのである。

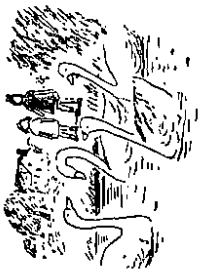
大きなはくちょうたちは、そばへおよいできて、くちばしでかるくなでてくれた。

小さな子どもがきて、水にパンや麦をなげてくれた。いちばん小さな子どもが、

「あすこに新しいのがいるよ。」

とさけんだ。すると、ほかの子どもたちも、

「そうだ。新しいのがきたのきた。」



と喜んだ。子どもたちは、手をたたいておどりまわった。おかあさんのところへ走っていって、もらってきたパンやおかしをなげてよこした。みんなは、

「新しいのが、いちばんきれいだ。」

といって、年をとったはくちょうが、新しいはくちょうのまえにきて頭をさげた。新しいはくちょうは、すっかりはにかんでしまった。どうしていいのかわからないので、つばさの中に頭をかくした。ほんとうに幸福であったが、すこしもいばらなかった。そのむかし、いじめられたり、あざけられたりしたときのことを考えた。それが、いまでは、すべての鳥の中で、いちばん美しいといわれる身のうえになったのである。にわとこの木でさえ、新しいはくちょうのまえにえだをたれた。太陽はあたたかく、おだやかにてらした。すると、つばさがサラサラと音をたてた。わかいはくちょうは、そのほそい長い首をあげて、心のそこから喜びそうにさけんだ。

「私がまだみにくいあひるの子であったとき、こんな幸福があろうなどとは、ゆめにも思わなかった。」

七　いねを育てて

4月27日（金）晴　19度

きょうは、種もみひたしをしました。品種は、あじのよい「農林1ごう」というのだそうです。

やく3.6 *dl* のもみを、水の中にひたしました。ういたもみがあったので、手ですくってみますと、かるいもみともみがらばかりでした。

水をいっぱいいれ、ふたをして日かげにおき、ときどき水をとりかえました。こうすると、なわしろにまいてから、早くめがでるということです。

5月2日（水）晴　20度

水をとりかえるときにみたら、もみのもとのほうがすこしふくらんでいました。

5月5日（土）雨　15度

もみのもとのほうから、はりのようにほそい、白いめのようなものがでました。これが、ほんとうにめになるのでしょうか。

5月7日（月）晴　18度

きょうは、お天気がいいので、もみまきをしました。種もみひたしをしてから、ちょうど10日めでした。はんごとになわしろをきめ、そのさかいにしるしをつけました。土をあまり深くほると、根が下へのびすぎて、あとでなえがよくとれないそうです。水のすむのをまって、むらのないようにまきました。ひたさない種もみをまいたところには、べつにしるしをつけておきました。いつ、めがでるでしょう。

5月15日（火）晴　20度

種もみから黄みどりのめがでました。ひたさないほうは、まだめがでません。

5月21日（月）くもり　18度

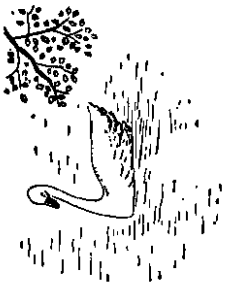
もう、なえが、2 *cm* から3 *cm* にのびました。ひたさない種もみからも、やっとめがでてきました。水にひたしたほうが、1週間早くでました。

だ。」

そういって、水の中にとびこみ、はくちょうのほうへおよいでいった。

はくちょうはあひるの子をみた。そうして、はねをひろげてゆったりと近づいてきた。

「――」



かわいそうにあひるの子は、ころされるものと思いながら、水の上に頭をたれた。そのとたん、すみきった水の上に自分のすがたのうつっているのをみた。それは、ぶかっこうなみっともないあひるの子ではなかった。はくちょうであった。

生まれがはくちょうのたまごであってみれば、あひるの小屋に生まれてもさしつかえはない。はくちょうは、その受けてきたまずしさとふしあわせとをかえって喜んだ。いまは、その身をとりまくりっぱなものの中に、しみじみと幸福をさとったのである。

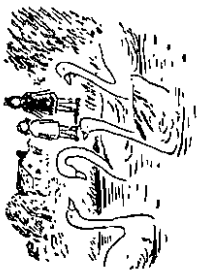
大きなはくちょうたちは、そばへおよいできて、くちばしでかるくなでてくれた。

小さな子どもがきて、水にパンや麦をなげてくれた。いちばん小さな子どもが、

「あすこに新しいのがいるよ。」

とさけんだ。すると、ほかの子どもたちも、

「そうだ。新しいのがきた、きた。」



と喜んだ。子どもたちは、手をたたいておどりまわった。おかあさんのところへ走っていって、もらってきたパンやおかしをなげてよこした。みんなは、

「新しいのが、いちばんきれいだ。」

といらと、年をとったはくちょうが、新しいはくちょうのまえにきて頭をさげた。新しいはくちょうは、すっかりはにかんでしまった。どうしていいのかわからないので、つばさの中に頭をかくした。ほんとうに幸福であったが、すこしもいばらなかった。そのむかし、いじめられたり、あざけられたりしたときのことを考えた。それが、いまでは、すべての鳥の中で、いちばん美しいといわれる鳥のうえになったのである。にわとこの木でさえ、新しいはくちょうのまえにえだをたれた。太陽はあたたかく、おだやかにてらした。すると、つばさがサラサラと音をたてた。わかいはくちょうは、そのほそ長い首をあげて、心のそこから喜びそうにさけんだ。

「私がまだみにくいあひるの子であったとき、こんな幸福があろうなどとは、ゆめにも思わなかった。」

七　いねを育てて

4月27日（金）晴　19度

きょうは、種もみひたしをしました。品種は、あじのよい「農林1ごう」というのだそうです。

やく3.6 *dl* のもみを、水の中にひたしました。ういたもみがあったので、手ですくってみますと、かるいもみともみがらばかりでした。

水をいっぱいいれ、ふたをして日かげにおき、ときどき水をとりかえました。こうすると、なわしろにまいてから、早くめがでるということです。

5月2日（水）晴　20度

水をとりかえるときにみたら、もみのもとのほうがすこしふくらんでいました。

5月5日（土）雨　15度

もみのもとのほうから、はりのようにほそい、白いめのようなものがでました。これが、ほんとうにめになるのでしょうか。

5月7日（月）晴　18度

きょうは、お天気がいいので、もみまきをしました。種もみひたしをしてから、ちょうど10日めでした。はんごとになわしろをきめ、そのさかいにしるしをつけました。土をあまり深くほると、根が下へのびすぎて、あとでなえがよくとれないそうです。水のすむのをまって、むらのないようにまきました。ひたさない種もみをまいたところには、べつにしるしをつけておきました。いつ、めがでるでしょう。

5月15日（火）晴　20度

種もみから黄みどりのめがでました。ひたさないほうは、まだめがでません。

5月21日（月）くもり　18度

もう、なえが、2 *cm* から3 *cm* にのびました。ひたさない種もみからも、やっとめがでてきました。水にひたしたほうが、1週間早くでました。

9月29日（土）くもりのち雨　23度

病気でせいののびないいねが、5かぶありました。先生におききしたら、このいねは、いもち病という病気にかかったのだとおっしゃいました。

10月20日（土）晴　22度

どのいねのほも、すっかり黄色になっておじぎをしています。1かぶのくきの数を数えてみますと、大きなかぶは30本もありました。こんどは1かぶのほの数をみんなでしらべてみました。1本ずつ植えたかぶには、ほが10ぐらいついていました。3本ずつ植えたかぶには、いちばん多いので16、ほかのは、だいたい12ぐらいでした。両方をくらべてみて、あまりちがわないことがわかりました。

もみの数をしらべてみました。1本のほに、多いのは180ぐらいずつついていました。ですから、1つぶの種もみから、やく1500つぶももみができたわけです。

10月25日（木）晴　23度

いねかりをしました。いねを根もとからかりとりました。じょうぶに作ったいねかけに、日がよくあたるようにきちんとかけました。

11月10日（土）晴　19度

いねこきをしました。いねこききかいをつかわずに、手でいねこきをした人もいました。ぼうのあいだにいねをはさんでこいだらよくとれました。こんどは、もみとごみをわけました。風のくる場所で、目の高さぐらいのところからごみをふきとばさせます。もみをむしろの上にひろげてほしました。

11月15日（木）晴　17度

天気のよい日に2日ほしたら、もみがよくかわきました。きょうはもみすりをしました。きかいがないのでくふうしました。いたといたのあいだにもみをいれ、ゴリゴリこすってもみがらをはじきました。きれいなお米がでてきました。

11月19日（月）晴のちくもり　18度

のこっていたもみを、1日、日光にかんかんほして、すぐにもみすりをしてみました。どんどんすっていたら、こんどはすぐにはげましたが、くだけた米もでてきました。ほしてすぐ、もみすりをするものではないと思いました。

やく12平方mの土地で、4lのげん米がとれました。平年作は、1平方mに3.5dlのげん米がとれるのですから、これは平年作ということになります。

者	洋	売	指	買	族	幸
福	予	言	血	信	皮	表
馬	万	単	位	速	秒	球
算	太	陽	満	着	横	寺
停	少	姉	重	農	夫	育
種	植	数	開	害		

こう話しかけたのは、ばらの花でした。

「もう夜ふけですよ。おやすみなさいな。」

「――」

くもは、なんといって返事をしていいのかわからないので、そのままだまっていました。

自分は、こうもりのために、高いところからたたき落されたが、たまたま、あの白いちょうちょにあうことができた。それから、いいゆめをみることもできた。いままた、ばらの花のやさしいことばをきくこともできた。

くもは、これらのことを一つ一つ思いだしているうちに、心持が、しだいにかわってきました。

ちょうちょにしても、ばらの花にしても、なんとしずかなくらしをしているのだろう。なんとおだやかなくらしをしているのだろう。それにくらべて、自分は、なんとあらっぽいくらしをしていることだろう。

あみをはり、かくれていて、ほかの虫がひっかかると、いきなりとびついてかみころすなんて、なんとひどいことをしてきたものだろう。

くもは、そっと自分の手をのばし足をのばしてみました。ふしくれた手、とがった足、うすきみのわるいかたち、いままでにこの手で、この足で――くもは、自分ながら自分のからだが、そらおそろしく思われてきました。

白ばらの花は、もう話しかけなくなりました。ぐっすりねむってしまったのでしょう。

くもが、月の光にちらりちらりと光りながら落ちてくる夜つゆをみていると、風がふいてきました。風と思ったのは、そうではなくて、つばめがすいととんできたのでした。

くもは、このつばめにひろわれました。くもは、つばめの口ばしにはさまれたまま、空をとんでいきました。

くもは、力いっぱいもがけば、あるいは、つばめのくちばしからころげ落ちることができたかもしれません。

けれども、べつににげだそうとはしませんでした。つばめは、麦畑らしい土地の上をとびました。湖の岸べをとびました。深い森のそばをとびました。

夜明けが近づいて、東の空が、ほんのりとしらみかけてきました。

「自分の命は、つばめさんにあげよう。」

こう決心がつくと、くもは、すっかりらくな気持になりました。いまのいままで、みにくいと思っていた自分のからだも、もうみにくいとは思えなくなりました。

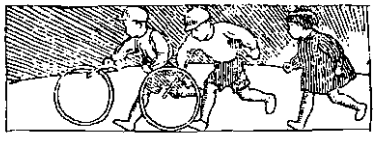
「お月さんのところへとんでいったあの白いちょうちょは、どうしたろう。うまくおかあさんにあえたかしら。」

そんなことをくもは思いました。

器加港情景例演候約協告
民航社園次養利法燈畑湖
貝雑登味判拝坂服格待移
主説類急止制勇階求飲湯
支熱

国語　第五学年　上

もくろく



一　美しいもの
二　ことばの愛
　少年・少女
　自分の國のことば
三　日の光
四　あなたの思っていることは
　（一）
　（二）
　（三）
五　発明二つ
　自動織機
　しんじゅ
六　私の妹
　妹のことば
　新しい世界
　妹の作文
七　ぶ　す
　能ときょうげんについて
　きょうげん「ぶす」

19

一　美しいもの

青空の美しさ、
朝明けの空、夕やけの空の美しさ、
月の夜、星の夜の美しさ、
いまも、美しいものはどこにでもある。
高い木が大きくえだをはって、
わかめをだしかけたこずえのさきが、
かすんだ空の中にとけこんでいる。
じつに美しい。
小鳥が鳴いている。
風が、かすかに耳もとをすぎる。
耳をすますと、なにか、かすかな音
楽がきこえてくるようだ。
どこからきこえるともないが、どこ
からかきこえてくる。
美しいものは、いまも、どこにでも
ある。
ただ、その美しいものを、すなおに
感じとる心を、われわれは失ってい
る。

毎日の生活のらんざつさとあわただしさの中に、それを失っている。
しかし、われわれは、いつでも、どこにでも、その美しいものを、すなおに感じとる心を、もちつづけたいものである。心がけひとつで、われわれは、どんなにでも毎日の生活を、ゆたかに、楽しくすることができる。

二　ことばの愛

少年・少女

おとうさんが、フランスのいなかへいったときは、子どもが大ぜい、めずらしそうについてきてこまりました。そういういなかへは、めったに日本人もいかないのです。日本人をみたことがない子どもたちは、おとうさんが通るたびに、目をまるくしました。おとうさんの歩いていくそばを、足ばやにかけぬけていって、てんでに、おとうさんの顔をのぞきこむようにしました。
こんなにうるさくついてこられたときには、おとうさん

もこまりましたので、子どもをさけて通ったこともありました。
しかし、おとうさんは、子どもと遊ぶことがすきですから、道で子どもたちが、なわとびをして遊んでいたりしますと、そのなかまいりをして、なわをまわしてやったこともありました。
二月半ばかり、いなかでくらすうちに、おとうさんには、子どものお友だちができました。
そういう子どもの中には、道でおとうさんをよびとめて、
「日本人、くりをおあがり。」
といいながら、おとうさんにわけてくれる少女もありました。

あのとげとげしたいががわれて、じゅくしたくりの実の落ちるころでしたから。
おとうさんは、知らない外國人どうしでも、こんなに親しみをもつことができるものかと思いました。その少女のわけてくれたくりは、むじゃきな心からでた、子どもらしい愛情のしるしでした。
ちょうど、プラタナスという木の葉が黄色くなるころで、いなかの子どもにとっては、もっとも楽しい季節でした。どこへいっても、遊びたわむれている子どもにあいました。
そのいなかの町には、ポンナフという石の橋があって、イエンヌという川が、その下を流れていました。
岸にあるおかの上には、センテチェンヌというお寺の高いとうもみえました。
そのあたりは、フランスの國道にそった景色のよいところですから、橋のたもとの休み茶屋へは、おとうさんもよくいってこしかけました。その橋のたもとにあるプラタナスのなみ木の下で、おとうさんは、三人のかわいらしい少女にもあいました。
みあげるように高いプラタナスのえだからは、黄色い葉が毎日のように落ちました。三人の少女は、その葉をひろい集めて、橋のたもとの石がきのところへきては、遊んでいました。おとうさんが、休み茶屋のまえにこしかけて、コーヒーをわかしてもらっていますと、きまって、その少女たちも遊びにきています。いず

23

ようちょ。立ちどまって、両手をひろげて深ときゅう。
「おとうさん。」とよぶ声。
その声をきいて、にっこりとわらう顔。
「おうい。」
また、「おとうさん。」とさけぶ。
「おうい。」
工員も走りだす。
男の子が、むちゅうになってかけてくる。
工員は男の子をだきあげる。
ふたりのうれしそうな顔。
日の光をいっぱいに受けた、はればれとした父と子。

24

四　あなたの思っていることは

（一）

ぼくは、いままでに学んだ「自然の観察」を、ずっとつづけていきたいと思います。

わざわざ遠くにでかけなくても、ふだん自分の身のまわりにあるものを、よくしらべてみる心がまえを、つくりたいと思います。庭の木に小鳥がくれば、その鳴き声や、とまりかたや、動きかたや、はねの色や、形などを、こまかにしらべたいのです。

トマトが畑に植えてあれば、そののびかたや、花のさきかたや、実のなりかたなどを、たんねんにみようと思います。

また、くもがのきにすをかけることがあれば、すのはりかたなどを、しらべておきたいと思います。

こんな動植物だけではなく、雪のようすや、星の世界なども、しらべていきたいと思います。

観察すればするほど、自然のおもしろさもわかり、そのふしぎなことにうたれ、美しさにおどろくにちがいありません。

（二）

私は、同じものをみるにしても、どうしてそのものがこうなったかということを、考えてしらべたいと思っています。

たとえば、毛糸のあみ物があれば、そのあみかたはどんなあみかたか、なぜ、このようなあみかたをしなければならなかったのか、よく考えてみたいと思います。

また、一つの和音を耳にしたときは、組みあわされた一

音一音のことも、心にうかべてみたいのです。

もようをみたときには、そのもようが、どんな単位からなりたっているか、それをさがしてみようと思います。

もし、弟や妹がけんかでもはじめたら、どうしてそんなことになったか、そのわけをよく考えていってみようと思います。

このように、なんでも、そのもとのことをしらべていくような心がけを、もちたいと思います。

（三）

ぼくは、みんなといっしょにはたらきたいと思います。

家では、弟たちのめんどうをみてやり、兄や姉の手助けとなりたいと思います。父や母のために、いつもすなおな子どもになりたいのです。

そうして、うちじゅうの人たちに、めいわくをかけないようにしたいと考えます。

ぼくがいるために、うちの中が明かるくなるように、できないものでしょうか。ぼくがいるので、みんな楽しい氣持になるようにできないものでしょうか。

学校では、組の友だちとなかよくして、助けあっていきたいと思います。かげで人のわる口をいわないようにしたいし、自分のもっているいいところを、えんりょしないであらわし、友だちのいいところを、すなおに学んでいきたいと思います。

自分をえらそうにみせかけたり、人をだましたりしないで、ありのままのすがたで、つきあっていきたいのです。

ぼくは、学校の生徒のひとりとして、りっぱにそのつとめをはたし、自分ひとりぐらいどうでもいいというような、無責任な、ひきょうな考えをもちたくはありません。

ぼくは、この学校では、かけがえのないひとりであることを、ほこるようになりたいものです。

いつも、全体の中の部分、部分があっての全体、というつながりをわすれないで、あいての人をうやまうとともに、自分のつとめをはたすだけの勇氣を、もちたいと考えます。

五　発明二つ

自動織機

「はたばかりいじっていて、おかしなやつだ。男のくせに。」

豊田佐吉は、村の人々から、こういってあざけられた。

佐吉は、父の大工のしごとを助けてはたらいていたが、ひまさえあれば、織機のことをしらべつづけていたのである。

夜になると、また、なわをなったりわらじを作ったりしました。ふつうの子どもだったら、くたくたになってたおれるところを、金次郎は、すこしもつかれたようすもなく、かえって、その体格もりっぱになっていきました。

金次郎は、一さつの本をみつけました。それは「大学」といって、かん文で書いたむずかしい本でした。その一まいめをめくって、くり返しくり返し読んでみると、りっぱな人になるためには、学問をしなくてはならないと書いてありました。

金次郎は、それを読むとうれしくなり、いっしんに勉強がしたくなりました。まきをとりに山へいく、そのいき帰りに、いつもその本を手からはなさず、くり返しくり返し、大声で読みながら歩きました。

「あの子は、どうかしているのではないだろうか。」

村の人たちは、こう、うわさをしましたが、金次郎は耳にもいれず、それを続けました。

お正月がくると、例年のことで、だいかぐらがまわってきました。たいこをたたいて、家から家へやってきます。どこの家でも、百文だして、おもしろい舞を舞わせましたが、舞わせない家でも、十二文あたえるのがならわしでした。金次郎のうちでは、その十二文さえありませんでした。けれども、そんなわずかな金がないということはいえません。母親と相談して、戸をしめきって、息をころして、だれもいないふうをしていました。金次郎のうちは、こんなにもびんぼうでした。

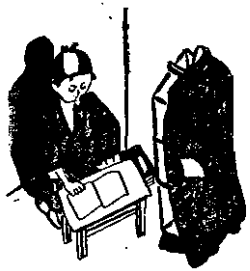
ところで、そのつぎの年、母親が、四五日の病気で死んでしまいました。おまけに、さかわ川がまたあふれて、のこっていたわずかの田や畑も、流されてしまいました。このとき、金次郎はたった十六でした。

そこで、ふたりの弟は母親のさとに、金次郎は親類のまんべえさんのところに、あずけられることになりました。

いままででも、なまけたことのない金次郎でしたが、そこへいってからは、いよいよいっしょうけんめいに働きました。そのうえ、夜おそくこっそりと勉強を続けました。

夜の勉強には油がいります。その油を自分でとりたいと思い、となりのおばさんから一にぎりのあぶらなの種をかりて、かわらへいって、あき地にまいておきました。あくる年の春、黄色い花がさいて、たくさんの実がつきました。これを油にかえて、本を読み続けました。

金次郎は、また、人がすてておいたいねのなえをひろって、大水でいたんだ田の水たまりに植えてみました。すると、秋の終りには、一ぴょうあまりの米を自分のものにすることができました。



この一ぴょうをもとにして、困っている人にかしてやったり、植えるところをふやしていったりするうちに、三年めには、二十ぴょうの米をとることができました。

やがて、金次郎は、親類の家からでて、もとの自分の家に帰り、一家をふたたびおこすことができました。それば かりではありません。いろいろのことを身につけて、やがて、村をすくい、多くの人からうやまわれるようになりました。

四田園

春

紅梅・白梅みなちりはてて、
ひがんすぎれば風あたたかく、
木々のつぼみも草のめも、
日々に色づきふとりだす。

続くひよりにさくらがさいて、
野山をかざると、もも赤く、
畑にさいて、れんぎょうは、
かきねを黄色にそめていく。

青い空にはかすみがこめて、
ひばりは朝から大うかれ。
えんどう・そらまめみな花つけて、
羽音高くみつばちがとぶ。

しとしとと降る春雨に、
やぶのたけのこすくすくのびて、
しずくすおうとでむしが、
つのをふりあげのぼりだす。

岸のやなぎのほわたがとんで、
麦のはしりほかがやく上を、
海こえてきたつばくろが、
すうい、すういととびまわる。

げんげがさいて、なの花ちって、
かきのわか葉に日の照るころは、

矢車からからこいのぼり、
村のわら屋の庭に立つ。

短か夜しらむを待ちかねて、
だいこんの花にあかつきの、
色ただよえば勇ましく、
すき・くわ持って野にいそぐ。

夏

ほたる追う夜も重なって、
麦のとりいれことなくすめば、
はい色雲が空うちおおい、
青葉・わか葉に雨ふりそそぐ。

さなえ運ぶ子、うし追うおきな、
家内そろって田植えする。
きのうの畑は水田となって、
晩にはかえるが歌いだす。

つゆ晴れ空はみどりにすんで、
日ましに日ざしが強くなり、
いねはそだつし、あぜまめのびて、
ふくすず風に夕はん樂し。

空にくずれる雲のみね、
庭にかがやくひまわりの花、
あぶらぜみの声さわがしく、
晝の休みもあせがでる。

まばゆく光るいなずまに、
続いてひびくらいの音。
たきと落ちくる大ゆうだちに、
いまの暑さはどこへやら。

くわをかついで田をみまわれば、
日はまた照って水たっぷりと、
いねのかぶばりこのうえもなく、
秋のみのりも思われる。

ひと日のあせもおさまって、
夕風ふけばたいこ鳴り、
清い歌声あちこちと、
こよい樂しいぼんおどり。

秋

はぎの花ふく朝風も、

音さえすずしくなってきた。
さやまめ・とうきびよくみのり、
いももふとってくるようす。

あまがき・しぶがき赤くなり、
くりもばらばら落ちだした。
こずえをかけるもずの音も、
すむ秋空によくひびく。

あぜに火とさくまんじゅしゃげ、
庭にもえたつはげいとう。
続くひよりに勇みたち、
いねもことなくとりいれた。

きょうはうれしい豊年まつり、
村道に立つ大のぼり、
ゆききの人もえ顔して、
その足どりもいそいそと。

かきねにおうきんもくせい、
しとしとと降る秋雨に、
ちれば山にはまつたけが、
かおりも高くはえてくる。

かえでにうるし、はじの葉も、
赤く黄色く色づいて、
冬のしたくをとりいそぐ、
村人の目をなぐさめる。

おおむぎ・こむぎの種まきすんで、
そらまめ・えんどうみなまいた。
冬の用意もしだいに進み、
あとはもみすりするばかり。

冬

山のもみじ葉みなちりはてて、
青くしげるはまつ・すぎ・ひのき。
夕ぐれ寒くふくこがらしは、
黄色くかれたくぬぎ葉鳴らす。

南にかたむく日につれて、
光はまともにえんにさす。
ほしたかぼちゃは赤やら黄やら、
にわとりどもはひなたぼこ。

23

はい色雲がたちこめて、
さとはしぐれがしとしと降るに、
ふもとの小屋はみぞれして、
うらの山には白雪つもる。

もちつきすませて、しめなわをはり、
一夜明ければうれしいはつ日。
廣場につどうたおとなりどうし、
え顔にほころびあいさつをする。

池にむすぶはうすごおり、
庭に立ったはしも柱。
学校へいそぐ子どもらの、
息はま白に舞いのぼる。

よべの大雪まだ降りやまぬ。
もうそうちくも重荷にたえず、
つばきの上にぽたぽた落す。
ことしも作はよいだろう。

ふきのとうでて、すいせんにおい、
うめもほころび、こちふけば、

春も目さきに近づいた。
どれ植えつけの用意をしよう。

五　新しい出発

やりなおし

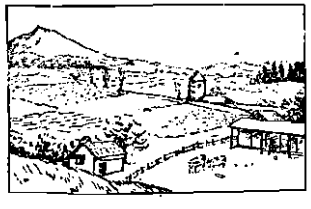
ようち園の卒業式がありました。
弟が卒業するので、私が、母にかわってでました。
正面のテーブルには、赤いうめの花をいけた、大きなかびんがかざってありました。
ようち園の子どもたちは、そのまえにおとなしくこしかけています。
園長さんが、だんの上にお立ちになりました。
女の先生が、卒業する子どもの名をお読みあげになりました。
「はい。」「はい。」「はい。」
みんな元氣のいい返事をして立ちます。
それをみようと、父兄の人たちは、自分の席で立ちあがります。子どもと父兄と、いっしょに呼ばれているようです。
みんな読みあげられてから、おめんじょうをいただくことになりました。
総代の名が、ひときわ高く呼ばれました。

弟の名でした。
私は、自分が呼ばれたような氣がしました。
弟は、すこし大またで四歩ほどまえに進みました。
そうして、園長さんのまえに向いたとき、
「あ、まちがった。」
と、大声でいいました。
弟は、さっさともとの自分の席にもどり、そこからでなおして進みました。
こんどはまちがいませんでした。
園長さんのまえにでて、だんをあがり、
両手をずっとさしのべて、おめんじょうをいただいて、
ささげ持つようにしながら、席に着きました。
私はほっとしました。
そうして、弟の心持を頼もしく思いました。
すこしぐらいのことだからといって、ごまかさなかった弟よ。
大ぜいの目のまえで、
「あ、まちがった。」
とさけんだ弟よ。
まちがったとき、思いきってやりなおした、その勇氣を頼もしく思いました。

じゃがいもをつくりに

じゃがいもをみると、ぼくは、北海道のいなかを思いだす。
みわたすかぎりのじゃがいも畑のうねの向こうに、
いつもぽっかりとういていたえぞ富士。
あの山のすがたが、小さいころのことを、いろいろと思いださせる。
ぼくが津軽海峡をこえて内地にきたのは、
ぼくの二年生のときだった。
津軽海峡の海の水が、こいみどり色にゆれて、
ぼくは、船のかんぱんに、おかあさんとふたりで立っていた。

北海道の家には、うしが四頭いた。
みんなちちうしで、ぼくによくなれていた。うちではバターもつくったし、こむぎこで、おいしい、やわらかいパンもやいた。
おかあさんがパンをやくそばで、
ぼくは、いつも本を読んでいた。
ぼくのいすは、小さなゆりいすで、
その下に、いつもかいねこのメリーがいた。



といって、名をなんと呼ぼうかと思っているうち、五日のあいだ呼びなれていた名が、しぜんと口にのぼってきました。

「さようなら、おとうさん。」

そういって、少年は、その小さな着物の包みを小わきにかかえました。

夜は明けかけていました。

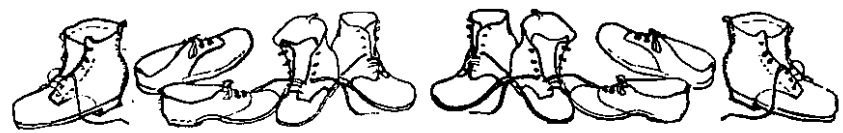
練習賛調令清働代続紅梅
照豊総留謝得包去陸医最
希

○でつつんだかん字は、「とう用かん字別表」（教育かん字）にはいっていないかん字です。

国語　第五学年　下

もくろく

一　小さな行
二　写生
三　わたしの民ちゃん
四　光を求めて
五　人形しばい
六　傳説
七　みえない力
八　雪まろげ
九　テニス
十　ことばのはたらき
十一　ある写眞帳



一　小さな行

コロンブスのたまご

コロンブスがアメリカを発見して帰ったとき、イスパニア人はたいへん喜びました。

ある日、祝賀会の席で、人々がかわるがわる立ってコロンブスの成功を祝しますと、ひとりの男が、

「大洋を西へ西へと航海して陸地にであったのが、それほどの手がらだろうか。」

といってあざわらいました。

これをきいたコロンブスは、つと立って、テーブルの上のゆでたまごをとり、

「みなさん、こころみにこのたまごをテーブルの上に立ててごらんなさい。」

といいました。

人々は、なんのためにこんなことをいいだしたのかと思いながらやってみましたが、もとより立とうはずがありません。このときコロンブスは、コツンとたまごのはしをテーブルにうちつけて、なんの苦もなく立てていいました。

「みなさん、これも人のしたあとでは、なんのぞうさもないことでございましょう。」

やまぶきの一枝

ある日、太田道灌（おおたどうかん）は、たかがりにでかけました。すると、にわか雨が降りだしたので、近くの家をたずねて雨具をかりることにしました。

「もしもし。」

こういって戸をたたきますとおくからひとりの少女がでてきましたので、

「雨で困っております。雨具をかりたいのですが。」

とたのみました。少女はなにを思ったのか、ふと庭さきにさいていた黄色なやまぶきの一枝をおってきて、それをしずかにさしだしました。

道灌は、その花の枝を手にはしましたが、なんのことだかその意味がわかりません。少女とやまぶきの花とをみくらべるばかりでした。

それからのちになって道灌は少女の心がわかりました。

それは、

「七重八重花はさけどもやまぶきのみのひとつだになきぞ悲しき。」

という古歌に、少女の思いをたくしたものでありました。

るまずしい人が、ふとしたことから、この岩屋からぜんやわんなどの家具のでることを知った。それからというものは、いり用のときはいつもここへきて、岩屋の入口で頼んだ。そうしてよく日いってみると、頼んだ品物がちゃんとそろってならんでいた。

そのことが評判になって、だれもかれもかりにいくようになった。その中にわるい人がいて、かりた家具をかりっぱなしにして返さなかった。

そののちは、だれがなんと頼んでも、かしてくれなくなったという。

十和田湖

十和田湖の近くの奥瀬村に、ひとりの木こりがいた。名を八郎といった。ある日のこと、八郎が山でしごとをしていると、のどがかわいてきた。

水を飲もうと思って小川の岸にでてみると、美しい小魚がおよいでいる。八郎はその魚をとってやいてたべた。

小魚はしおからかったので、のどがかわいてたまらない。そこでまた川の水を飲んだ、いくら飲んでものどのかわきはとまらなかった。

そのうちにからだがだんだん長くのびて、おしまいにへびになってしまった。家にはひとりの母がある。母にそのからだをみせるにはしのびない。また人にみられるのもこまる。

八郎は思い切って、水ぞこにとびこむと、小川がひろがって、みるみるうちに湖となった。それが十和田湖のおこりだということである。

七　みえない力

根

葉は青く、
くきは長く、
みきは高くそびえているが、
根はちっともみえない。
花は美しく、
実はうまい。
しかし根はちっともみえない。
根のさきは毛より細い、
毛よりもやわらかだ。
その細いやわらかなものが、
地をうがち岩をおしわけ、
深く廣くのびていく、
のびていく根のさきをさえぎるものはなにもない。

おおづなのようなたくましい根が、
深くのびてみきをささえ、
廣くのびて枝をやしない、
それからでた細い根が、
つなのようにからみあって、
葉を育て花をさかせる。

根はみえない。
みえないが深くて長い。
深くて長い根の上に、
みごとな草や木がしげっていく。

のこぎり

のこぎりには、はがある。
のこぎりのはは、
いぬの歯のようにとがって、
一つおきに右と左にすこしよじれて、
二十も三十も続いている。
五十も六十も続いている。
のこぎりのはは、
いつもやすりをかけて、
右と左によじっておかないと、
なんの役にもたたない。

のこぎりは、
あつみをもっている。
大きなかたい物を切るのこぎりのはは、大きくてあつい。
小さなやわらかい物を切るのこぎりのはは、小さくてうすい。
糸のこは糸のように細く、
ひきまわしはひじょうにせまい。
まっすぐに長く切るのこぎりは、廣いはばをもっている。
こびきの大のこははばが廣いし、
製材所のまるいのこぎりも、大きなさしわたしをもっている。
はたらきのある人は、
はをもったのこぎりにている。

しかし、いつも勉強してみがきをかけていないと、
じき、役にたたなくなる。
どんなにはたらきがあっても、
それにあつみと、
廣さがなかったら、
正しくりっぱに世の中をわたることができない。

八　雪のまろげ

深川の芭蕉の家の近くに、曾良という人が住んでいました。

曾良は、信州の人で、歌がたいそうじょうずでしたが、芭蕉のことをきいてから、その弟子になりました。そうして、はい句を勉強することに心をきめました。

曾良は思いました。芭蕉はたったひとりで住んでいて、なにかにつけて不自由であろうから、いろいろお手傳いをしてあげたい。下男のように住みこんであげてもいいけれども、芭蕉はひとりしずかにしているのがすきだというし、家もせまいので、自分は、その近所に別に家をかりて住むことにしました。

そうして、毎朝早くきては、芭蕉のおきないうちに、いどから水をくみあげたり、ごはんをたいたりしました。また、まきが少ないと、近所へ木をひろいにいったりしました。このようにして芭蕉につかえながら、はい句の話をきくのでした。先生の近くにいればこそ、毎日教えてもらえるので、これがなによりうれしいと、曾良は喜びました。

そのうちに、冬がきて、くもった空がひくくたれる日が続きました。芭蕉はからだがよわいので、寒さは身にこたえましたが、雪をみるのが樂しみでした。芭蕉は、くもった空をあおぎながら、雪が早く降るといいなあと待ち遠しがっていました。そのあたりに遊んでいる子どもたちも、同じ氣持でした。まだなにも降ってきもしないのに、

「雪やこんこん、あられやこんこん。」

などと、はやしたてていました。

芭蕉は、子どもが大すきでした。そのあたりにいるのは、川べりにある船大工の子どもや、のりをとりにでるりょうしの子どもたちで、どれも身なりはきれいではないのですが、芭蕉はいつも遊び友だちにしていました。

「みんなは、雪が降ったら、なにをして遊ぶの。」

「雪だるまを作るの。」

「じゃあ、おじさんも手傳ってあげよう。」

話をしているうちに、パラパラと音がして、白い小さなつぶつぶのものが落ちてきて、子どもたちや、芭蕉の足も

とに落ちて、はね返ったりころがったりします。

「やあ、あられだ、あられだ。」

子どもたちは、小さな手をしゃくしにして、受けようとしますが、あられはその手にはのらないで、顔にあたったりふところにとびこんだりします。芭蕉は、にっこりわらって立っていましたが、子どもたちのかけていく方に、自分もいっしょにかけだしたいと思いました。

いざ子ども走りあるかんたまあられ。

芭蕉の待ちに待った雪が、とうとうくれがたから降ってきました。みるみるうちにつもりましたが、曾良が水をたくさんくんでおいてくれたし、まきもたくさんとってきてくれてあるし、そのうえ、台所の米入れの大きな入れ物もかなり重いので、二三日は困ることもありません。

ふだんは筑波おろしがさわがしく、雨戸をゆさぶったり、大川の波の音がバサリバサリと、まくらにひびくのでしたが、その夜は、すべての音も雪にうずめられたようなしずかさでした。そのしいんとしたしずかさの中に、芭蕉は、心をすませ、雪の句を考えました。

トントン、トントンと入口をたたく者があります。

「先生、もうおやすみですか。」

その声は、毎日ききなれている曾良の声です。芭蕉はすぐ戸をあけました。

「こんなに降るのによくきたな。」

「先生は、おひとりでどうしていられるかと思うと、どうしてもこずにはいられませんでした。」

「友だちがほしくなるのはやはりこんな晩だ。まあ、火をたきつけておくれ。」

やがていろりには、パチパチとしばがもえあがります。

「先生、今夜の雪の句はいかがですか。」

「句か、まだできない。だが、みせるものがあるよ。」

芭蕉は、えんがわにいってなにか持ちだしてきました。それは、赤いおぼんの上に、雪をまるめてこしらえたうさぎでした。なんてんの実が、赤く、うさぎの目らしくいれてありました。

曾良は、芭蕉の子どもらしい手すさびがすっかりうれしくなりました、ふたりは子どものようにわらいました。

きみ火をたけよきものみせん雪まろげ

九　テニス

少　年

国語　第六学年・上

もくろく

一　しずかな午前
二　眞理
　知識と迷信
　ガリレオ
三　みどりの野
四　ホートン風景
五　電話
六　そよ風
　土
　チューリップ
　しか
　きり
　短日
　わらいの歌
　牧場
　わたしの心はにじを見るとおどる
七　ある画像

一　しずかな午前

どらん、まだこのかれ木のままの、高いけやきのこずえの方を、
そのこずえの、細い、細い小枝のあみ目の先にも、
はやふっくらと、季節の命はわきあがって、
まるで、息をこらしてしずかにしている、子どもたちのむれのように。
その、まだ目にもとまらぬ、小さな木のめのむれは、
おたがいにひじをつつきあって、ことばのないかれらのことばで、なにごとか、ささやきかわしているけはい。
春は、はや、しばふに落ちかかる木もれ日のしま目もようにもちらちらとして、あさい水には、あしのめがすくすくと、するどい角をのぞかせた。
長くかなしみにしずんだものにも、
春は、希望の帰ってくるとき、
新しい勇氣や空想をもって、
春は、また、楽しい船出のほぬのを、高くか

かげる季節。
ひばりやつばめも、やがて、遠い國からここに帰って來て、
私たちの頭上にとびかい、歌うだろう。
すみれ、たんぽぽ、わらびや、ふきや、たけのこや、
ちょうや、はち、へびや、とかげや、青がえる。
やがて、かれらもせいぞろいして、かげろうのたいまつをたいて、おしよせて來る。
ああ、そのさかんな春のきざしは、よもにあらわれて、
目に見えぬかすみのようにたなびいている、のどかな午前。
どこともしれぬ方角の、遠い、はるかな空のおくで、鳴いているからすの声も、
ほんとうにのんびりとして、ゆめのように、眞理のように、
白雲をかたにまとった小山をめぐって、聞えてくる。
ああ、季節のこういうのどかなとき、
こういうしずかな午前にあって考える、
——人生よ、長くそこにあれ。

二　眞理

知識と迷信

知識は、人から教えられたり、自分で本を読んだり、考えたり、調べたりして、しだいにましていく。一人まえの人として、自分のつとめをはたしていくために、知識をますことは、たいせつなことがらである。

知識には、浅いものと深いものがあるが、その深く進んだものを科学的知識という。深い、正しい知識を得るには、考えたり、調べたり、また、種々の器械をつかって観察したり、実験したりする。そうして、これをいくどもくり返してたしかめ、すでに知ったことを材料として、考えをおし進め、種々のことがらの関係を明らかにして、きまった法則を知る。

いいかえれば、ものごとの原因と結果との関係や、その間に行われる法則を知って、ととのった知識とし、また、さらに進んだ研究をする土台にするのである。たとえば、花のおしべとめしべとの関係についていうと、おしべのかふんがめしべにつかないようなくふうと、いま一つ、よくつくようなくふうをして、その実験を重ね、かふんがめしべにつくときはよくみのるが、つかないときはみのらないことを、知るようなものである。

知識が開けず、科学の進まないところには、迷信が行われる。むかしは、星を見て世の中がみだれるといったり、でんせん病がはやると、ほうき星が出たからだといったり、あるいは、きつねがつくとか、からすの鳴き声がわる

話らしくしなければなりません。
あいてのいうことを聞いて、それから三郎くんのことばをいい、そうして、三郎くんのことばだけで、すっかりようすがわかるように、くふうします。
見物人にせなかを向けないように、顔の表情がよく見えるようにすることも、たいせつなことです。

六　そよ風

ありが、
ちょうの羽をひいて行く。
ああ、
ヨットのようだ。

チューリップ

はちの羽音が、

しか

午前の森に、しかがすわっている。
そのせなかにその角のかげ。
あぶが一ぴきとんで來る。

チューリップの花に消える。
そよ風の中にひっそりと、
客をむかえた赤いへや。

はるかな谷川を聞いているその耳もとに。

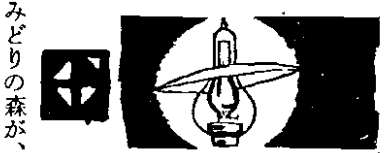
き　り

山の湖水のほとり、
「ます」小屋のランプが、
きゅうに暗くなりました。

短　日

かれぎくをたいている。
とやへ追われて行く、白いレグホンたち。

わらいの歌



みどりの森が、喜びの声でわらい、
波だつ小川が、わらいながら走っていく。
空氣までが、わたしたちのゆかいなじょうだんでわらい、
みどりの丘が、その声でわらいだす。
牧場が、生き生きしたみどりでわらい、
きりぎりすが、楽しい景色の中でわらう。
メアリとスーザンとエミリとが、
かわいい口をまるくして、ハ・ハ・ハイとわらう。
わたしたちが、さくらんぼと、くるみのごちそうをならべ

ると、
その木のかげで、きれいな鳥がわらっている。
さあ、元氣でゆかいに、手をつなぎましょう。
うれしいハ・ハ・ハイを、合唱しましょう。

牧　場

牧場の泉を、そうじに行って來るよ。
ちょっと落ち葉をかきのけるだけだ。
でも、水がすむまで見ているかもしれない。
すぐ帰って來るんだから、きみも來たまえ。
子うしをつかまえに行って來るよ。
母うしのそばに立ってるんだが、
まだあかんぼうで、母うしがしたでなめると、よろけるんだよ。
すぐ帰って來るんだから、きみも來たまえ。

わたしの心はにじを見る
とおどる

わたしの心は、にじを見るとおどる。
おさないころにそうだった。
おとなになってる、いまもそうだ。
やがて老いても、そのように。
そうでなければ、死んでいたい。

おさな子はおとなの父だ。
それで、わたしは望ましい、
わたしの日々が、
自然をしたう心で、
一日一日と、むすばれていくように。

七　ある画像

もとの先生から、一まいの絵はがきをいただきました。
絵は、はがきの上の方に、まるく原色ですってあります。
まだわかい、美しいおかあさんが、まるまるふとったかわいいあかちゃんをだいていて、その右の方に、もうひとりの子どもがよりかかっている絵です。
その下の白いところに、先生の手で、こう書いてありました。
「これは、いまから五百年ほど前に、イタリアのラファエルという画家のかいたもので、『いすによるマドンナ』といわれています。これを見て、どう思いますか。」
ぼくは、その絵を見ると、そのあかちゃんがキリストで、

か三のわかさで、せんばいをしのいで大家になり、自由にふでをふるって、りっぱな作品をたくさんのこしたのはえらいよ。こんなことを考えて、きみも勉強を続けるんだね。きっと先生も、そんなお氣持で、この絵はがきを送ってくださったんだろう。」

識迷浅関係則結果漢他反
紀焦公牧鉱州賠償精軍復
期努市句給番像達

国語　第六学年　中

もくろく

一　おかあさん
二　外國からきたことば
三　星の光
四　夜明け
五　心に太陽をもて
　　心に太陽をもて
　　くちびるに歌をもて
六　とりいれまつりの夜
七　茶わんの湯
八　木もと竹うら
　　（一）
　　（二）
九　雪の映画
十　マッチ賣りのむすめ

一　おかあさん

世界の名高い文学者で、その名のわが國に知られている人は、けっして少なくはありません。けれども、フランスのシャルル・ルイ・フィリップの名は、すこしちがった特別なひびきをもって、私たちの心をうつのです。なぜでしょう。それは、フィリップの作品の中にみなぎっている大きな愛の氣持、そこからさしてくるとうとい光のためなのです。フィリップは、まずしいもの、苦しんでいるもの、ふしあわせなものの中に、かえって、人間としての心のとうとさをみつけたのです。そうして、心の正しい人々の苦しみを、自分もともに苦しんだのです。だから、フィリップの作品の中には、たしかに、私たちを心のそこから動かし、私たち自身の生活を思わずふり返らせないではいない強い眞実の力が、こもっているのです。

それというのも、フィリップ自身、中部フランスの小さな町のまずしい木ぐつしの子に生まれ、おさないころから、人の世の苦しみをいろいろとなめていたからのことでした。しかし、フィリップのすなおな心は、まずしさのために、すこしもゆがめられたりはしませんでした。

こうしたフィリップの純眞さ、誠実さ、それは、かれが、父を失った直後、文学修業のためにパリーに出て、市役所のガス係という職についたとき、ふるさとにのこした母へ送ったつぎの手紙の中にもよくうかがわれます。老いた母を思う子の眞情は、遠く海をこえて、私たちの胸にまでせまってくるではありませんか。

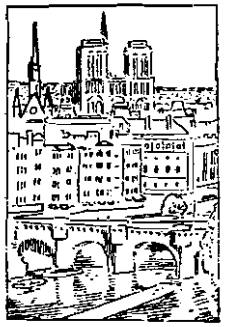
○

パリー、千九百七年四月十日

おかあさんとちょっとお話をしようと思います。私は短い旅をしたあとで、七時にパリーに着きました。たって以來、一分間も、おかあさんのことを考えないではいられませんでした。

なつかしいおかあさん、おわかれしてから私がいちばんつらかったことは、おかあさんがかなしがっていらっしゃると思うことでした。

子どもたちのことをお考えになってください。そうして、ご自分にはまだ子どもたちがのこっている、子どもたちはじゅうぶん愛していてくれる、だから、自分はたしかにひとりぼっちではないのだと、お考えになってください。どうしても一どはおこらなければならないことが、おこったというにすぎないのです。私たちは、おとうさ



そうして、なんでこんなにほがらかでいられるのか、それを、こう話してやるのだ。

くちびるに歌をもて、
勇氣を失うな。
心に太陽をもて、
そうすりゃ、なんだってふっとんでしまう。

くちびるに歌をもて

スコットランドの西岸のおきあいで、ローマン号という小さな汽船が、十ばいもある定期船につきあたって、ちんぼつしてしまいました。千九百二十年十月の、ある月のない夜のことです。乗っていた百四人のうち、乗組員十一人、船客十四人のゆくえがわからなくなりました。

アイリッシュ・ナショナル保険会社の社員、フランク・マッケンナも、しずんでいく船からほうりだされて、黒い波の間をおよいでいました。助け船は、いったい、なにをしているのだろう。かれは、氣が氣ではありませんでした。

助けを求めてなきさけぶ声も、いつか聞えなくなりました。すべてのものが、ことごとく波にのまれてしまったように、死のしずけさがあたりに廣がりました。すると、そのきみのわるいしずけさの中から、とつぜん、まったく思いがけなく、きれいな歌が流れてきました。それは女の声で、しかも、調子もみだれていなければ、ふるえてもいません。まるで、大ぜいの來客を前にして、客間で歌っているのと、ちっともちがわないような歌いかたです。

マッケンナは、しばらくしんみりした氣持で、この歌に聞きほれていました。かれは、いままでにどれだけ歌を聞いたかしれませんが、このときぐらい、しみじみと歌のありがたさを味わったことはありませんでした。なんだか、すうっといい氣持になって、自分が水の中にひたっていることも、わすれてしまったほどでした。寒さも、つかれも、どこかへけしとんでしまって、すっかり、よみがえったような氣持になりました。

歌っている人は、どういう人かわかりませんが、おそらくは、自分と同じように、船からなげだされたものでしょう。たいていの人は、しょうとつのときにあわてふためいて、そのために、かえって波にのまれてしまったのに、こんなきけんのせまった中で、なんというおちついた、またなんというほがら

かな人だろう。自分なんか、およいでいるだけがせいぜいなのに、こんな暗い夜、こんな海のまん中で、よくあんな美しい声がだせるものだと思いました。そうして、自分もどうせ助からないものなら、こういう美しい歌に送られて、死んでいきたいものだと思いました。

かれは、歌の声をたよりに、その方におよいで行きました。

近づいてみると、船がしずむひょうしに流れ出たものらしい一本の大きなまるたに、なん人かの婦人がつかまって、立ちおよぎをしていました。歌を歌っているのは、その中のひとりでした。

まだわかいおじょうさんです。頭から大波をかぶっても、平氣で歌を続けていました。助け船のくるのを待つ間、ほかの婦人たちが力をおとさないように、寒さに氣を失って、まるたから手をはなさないように、こうして元氣をつけていたのです。

「心に太陽をもて、
くちびるに歌をもて。」

このおじょうさんは、この歌を知っていたかどうか知りません。しかし、このおじょうさんくらい、この歌の心を生かした人は少ないでしょう。このおじょうさんこそ、ほんとうにこの歌を歌った人というべきです。

さて、おじょうさんの歌をたよりに、マッケンナがおよいで行ったように、やがて、一そうのボートが、やみをぬって助けにきてくれました。やはり、その美しい声を手がかりにして。

そうして、マッケンナも、その歌を歌っていたおじょうさんも、そのほかの婦人たちも、みんなすくいあげられました。

このことは、あくる日の新聞に出たマッケンナの話で、あきらかになったのですが、おしいことに、歌を歌ったおじょうさんの名まえがわかりません。しかし、たとい、名まえがわからなくても、あの美しい歌は、いまも、われわれの耳にひびいてくるように感じられるではありませんか。

六　とりいれまつりの夜

ある家の、かぼちゃのとりいれまつりの晩のことでした。

「ひさしぶりにごちそうをたべて、たいへんゆかいです。それで、よきょうに、『このかぼちゃはだれのものか。』という話しあいをやってみたら、おもしろいだろうと思いま

31

す。」

こういいだしたのは、根のしるしをつけた老人でした。

「賛成、賛成。」

「では、花さんからおはじめなさい。」

花は、美しいわかい女でした。

「それでは、座長の根さんのご指名で、私から申します。もちろん、このかぼちゃは私のものです。私の花がさかなかったら、実はつきません。根や、つるや、葉のないかぼちゃはありませんが、それだけでは実はつきません。花、とりわけ、め花がさいて、はじめて、かぼちゃの実がつくのです。こんな、十キロもあるような大きなかぼちゃでも、それは、花の一部であるめしべの根もとが、大きくふくれただけのものです。だから、それは、私たちの花のものだということはうたがいありません。」

「こんどは、葉さん、いってごらんなさい。」

葉は、元氣のいい青年でした。

「花さんは、たいへんじょうずに自分のことを主張なさいましたね。しかし、どうしてそのめしべの根もとがふくれて、そんな大きな実になったかということは、ごぞんじないようですね。それは、私が、いつも日あたりのいいところに出て、じりじりと暑い日に照らされながら、せっせと養分をこしらえて、送ってあげたからですよ。私は、せっかく花が開いても、とちゅうから、黄色くなって落ちてしまったたくさんのかぼちゃの花を見ています。あれは、私たちの養分をこしらえる力をかまわずに、あなたがたが、かってに花をさかせたからですよ。だから、このかぼちゃは、全部私のものだと思います。」

「では、つるさん、どうぞ。」

「いや、どうか根さんから。」

「では、おさきに申します。さっき、葉さんは養分のことをおっしゃいましたが、それは、大部分、根の私が、土の中から吸いとって、送ってあげたものです。みなさんのように、明かるい地の上でくらしているかたには、土の中のことはわからないでしょう。

そこは、暗いところで、土もかたいし、石ころなども、ごろごろしています。そこへ細い根をのばして、水と養分とを吸いとって、夜も晝も送ってあげるのは、たいへんなほねおりです。だから、私は、やっぱりそのかぼちゃは、私のものだと思います。」

「ほかに、だれもいませんから、私が申します。」

おとなのつるは、しずかにいいました。

「私は、こんなに長いばかりで、花さんや、葉さんや、根さんのような、特別なはたらきは、なに一つございません。しかし、根さんが、せっかく吸ってくださった地の中の水や養分でも、葉さんが、それを日の光にあてたり、空氣をお吸いになって、養分におこしらえになったものでも、私が運んであげなかったら、りっぱなかぼちゃの実にはなりません。また、花さんでも、葉さんでも、日のあたるところや、高いところがおすきなようですが、そこへつれて行ってあげるのは、この私です。もし、つるの私がとちゅうで切れたりしたら、それについている葉でも、花でも、なりかけている実でも、みんなかれて、くさってしまいます。

ごらんなさい、私のこの足を、手を。こんな大きなきずができていますが、私は、いっしょうけんめいそれをなおして、あなたがたがかれないようにしてあげたのです。だから、私は、そのかぼちゃは、全部私のものだと思います。」

つるがこういったとき、高い声でわらいながら、どやどやとはいってきたものがあります。それは、頭のぼうしで、日、水、土、はちたちだということがわかりました。

「あははは、いま、戸の外で聞いていると、あなたたちは、ずいぶんかってなことをいっていましたね。あなたがたは、自分のことしか考えないようですが、もし、私、つまり太陽がなかったら、どうなると思います。

いったい、かぼちゃは熱帯地方のものです。それがこの日本でできるためには、私が熱と光とをゆたかに送ってやったからです。さっき、葉さんや根さんは、養分のことをいっていらっしゃいましたが、それを養分につくるのは、葉さんでなくて、私ですよ。そういうことを考えてみたことがありますか。」

水が続いていいました。

「生きものに、いちばんたいせつなものは、私たち水です。水がなかったら、なんでもすぐ、かれたり死んだりしています。この大きなかぼちゃは、ずいぶんかたいようですが、やっぱり、この大部分は水です。いまのお話の養分だって、水にとけているから、根から実まで運んでいけるのですよ。それから、空から降る雨、あれだって水ですよ。あのかわききった夏のさいちゅうに、あの雨のおかげで、かれるのが助かったことを考えてごらんなさい。」

32

土が立ちました。

「ぼくは、いちばんじみなものです。しかし、土にはえていないかぼちゃなんて見たことがない。さっきから問題になっている養分だって、みんな私がわけてあげたのです。水だって、ためておいてあげたのです。ほかのことはわすれても、この土のことは、かたときもおわすれになれないでしょう。」

すると、いたずらなはちがいいました。

「花さん、あなたが、どんなに美しくさいたって、ぼくがとびまわって、かふんをなかだちしてあげなかったら、実は一つもつかなかったのですよ。だから、あのかぼちゃは、みんなぼくのものだといってもいいのです。しかし、ぼくは、そんなよくふかい、身がってなことはいいませんよ。あなたがたは、どうして地面にはえたのか、考えたことがありますか。」

花も、葉も、つるも、首をひねって考えていました。しばらくして、根がいいました。

「ああ、やっと思いだした。人間が來て、まいてくれたのだった。もし、あの人間がいなかったら、また、その人間がせわをしてくれなかったら、私たちは、はえもしなければ、大きくもならなかったかもしれない。」

つるも、うなずいて、

「そうです。このかぼちゃは、だれのものとも、簡單にはいえませんね。公平にいって、みんなのものです。しかし、いちばんいい種を、來年もわすれずにまいてもらうことができさえすれば、このかぼちゃは、お礼に、すっかり人間にあげてしまっても、さしつかえないと思いますが、どうでしょうか。」

「同感。同感。」

と、日や、土や、水などがいいました。花も、葉も、根も、みんな賛成しました。

七　茶わんの湯

ここに、茶わんが一つあります。中には、熱い湯がいっぱいはいっております。ただそれだけでは、なんのおもしろみもなく、ふしぎもないようですが、よく氣をつけて見ていると、だんだんに、いろいろのこまかいことが目につき、さまざまのうたがいがおこってくるはずです。ただ一ぱいのこの湯でも、自然の現象を観察し、研究することのすきな人には、

なかなかおもしろい見ものです。

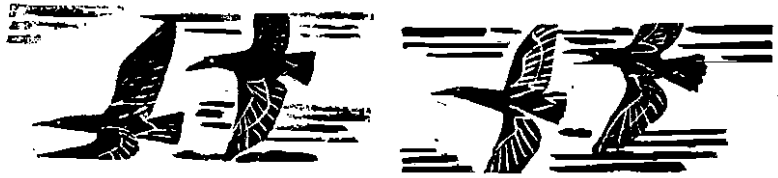
第一に、湯の表面からは、白い湯げがたっています。これは、いうまでもなく、熱い水蒸氣がひえて、小さなしずくになったのが、無数にむらがっているので、ちょうど雲やきりと同じようなものです。この茶わんをえんがわの日なたへ持ちだして、日光を湯げにあて、向こうがわに黒いぬのでもおいてすかして見ると、しずくのつぶの大きいのが、ちらちらと目に見えます。ばあいにより、つぶがあまり大きくないときは、日光にすかして見ると、湯げの中に、にじのような、赤や青の色がついています。これは、白いうす雲が月にかかったときに見えるのと、にたようなものです。この色については、お話することがどっさりありますが、それは、また、いつかべつのときにしましょう。

すべて、まったくとう明なガス体の蒸氣が、しずくになるときには、かならず、なにか、そのしずくのしんになるものがあって、そのまわりに、蒸氣がとってくっつくので、もし、そういうしんがなかったら、きりは、たやすくできないということが学者の研究でわかってきました。そのしんになるものは、ふつうけんび鏡でも見えないほどの、たいへんこまかいちりのようなものです。空氣中には、それが、しぜんにたくさんういているのです。空中にうかんでいた雲が消えてしまったあとには、いまいった、ちりのようなものばかりがのこっていて、飛行機などで、横からすかしてみると、ちょうど、けむりが廣がっているように見えるそうです。

茶わんからあがる湯げをよく見ると、湯が熱いかぬるいかがおおよそわかります。しめきったへやで、人の動きまわらないときだと、ことによくわかります。熱い湯ですと、湯げの溫度が高くて、まわりの空氣にくらべてずっとかるいために、どんどんとさかんにたちのぼります。反対に、湯がぬるいと、いきおいがよわいわけです。湯の溫度を計る寒暖計があるなら、いろいろ自分でためしてみると、おもしろいでしょう。もちろん、これは、まわりの空氣の溫度によってもちがいますが、おおよそのけんとうは、わかるだろうと思います。

つぎに、湯げがのぼるときには、いろいろのうずができます。これがまた、よく見ていると、なかなかおもしろいものです。せんこうのけむりでもなんでも、けむりの出るところからいくらかの高さまでは、まっすぐにあがりますが、それ以上は、けむりがゆらゆらして、いくつものうずになり、それがだんだんに廣がり、入りみだれて、しまいに見えなくなってしまいます。茶わんの湯げなどのばあいだと、もう、茶わんのすぐ上から大きなうずができて、

国語　第六学年　下



もくろく

一　まさに立つべし
　矢と歌
　朝ざくら
　みかん
　わか草
　月夜
　ばらの花
　まさに立つべし
二　大わしに乗った話
三　文字の話
　文字のはじめ
　漢字
　かな
　ローマ字
　日本語の書き表わしかた
四　めぐりあい
　赤絵のはち
　熱情のことば
五　その人のことば
六　幸福の園
七　最後の学級日記

一　まさに立つべし

矢と歌

空にはなちし　わがそ矢は、
あわれいずこに　落ちにけん。
ときいきおいに　まなこすら、
その行く末を　見ざりけり。

空にとなえし　わが歌は、
あわれいずこに　落ちにけん。
いかに目ざとき　人とても、
声の行くえの　見えんやは。

遠くそののち　かしの木に、
矢はまだおれで　とどまりぬ。
歌のもと末　ふたたびも、
友の心に　あらわれぬ。

朝ざくら

だいだいは実をたれ時計はカチカチと
朝ざくらみどり子にいうさようなら

家を出て手をひかれたるまつりかな
六つほどの子がおよぐゆえ水わかな
冬の水一枝の影もあざむかず
うしはしずかにおのおのの大きな耳をむけぬ
みんてききりの中鉄のひびきのかじ屋の火
息白しいつまで残る明星ぞ
さい晩や火のこ豊かの汽車けむり
影絵めく牛馬朝日を織るあきつ

みかん

みかんむこうと手ぶくろをぬぐ山ふかく
さくらさくら人が人が子を歩かせて
かわずだまりて人の足大きくすぐる
きみわれ口そそぐ朝のそこここの小流れ
木はしずかに流るると見ればもの花
こどもら手をつないだ中を日ぐれのうまが通る
はまの子ら火をたく青き月夜となり
うまよ人間のかさから耳をだして
まんじゅしゃげおりすてある道のまんじゅしゃげさき続く
子どもみんな早口に話しつつ來る子どもと子ども
日の第一線が燈台の高きに
れんげつみて子といる母の黒いこうもり
月が出る山の家にうしをつないだ木

わか草

て兄が特権を與えられねばならないという理由はすこしもない。親としてみれば、自分の子女にはすべて同じ教育をほどこし、同じ機会を與えて、社会に巣だたせたいのが念願である。神の目から見れば世界の人類はすべてその愛する子どもなのだから、人種的な区別など、あるべきはずはない。四海の民すべて兄弟姉妹である。それで、世界平和、人間平等という理念が、ここからわいてくるのだ——と、テーブルをたたいて立ちあがった老博士は、フィッシュナイフをにぎった右手を大きくふりまわし、

「愛はにくしみよりも強い。」

と、力をこめてさけびながら、そのにぎりこぶしを私の鼻先につきだされた。——ああ、忘れもしない、満面べにをさして語られたホランド博士のあの熱情のことば。

日本へ帰ったら、新島夫人にきょうのゆかいな会見のてんまつを傳えてくれといいながら、自動車のドアに手をかけた老博士が、さらに、

「先ほどの話は、こころよくひきうけたよ。」

とささやかれた。博士は、そのことばの意味をときかねていた私のようすを見て、大きな声でわらわれ、こんどははっきりと、

「きみの論文を、カーネギーで出版することは、ひきうけたよ。」

といいたされた。

ああ、新島のおじさんが、いまなお満ぼうを守っていてくださったのだ。

私は、停車場まで送ってくださった博士のこう意をふかく謝して、別れの手をさしのべると、博士は満面ににこやかなわらいをたたえながら、

「ドウイタシマシテ。」

と、意外なあいさつをされた。そうして、これが新島からならった日本語の一つだといわれた。

五　その人のことば

生きるためにたべよ。たべるために生きるな。

きょうのできごとを、あすまでのばすな

神は、みずから助くる者を助く

——フランクリン——

きみたちの考えが、たとい世間の考えとちがっていても、その発表をためらってはならない。

はじめ、きみたちは、世間の人にわかってもらえないかもしれない。けれども、きみたちは、ほどなく、みかたができるだろう。ひとりの人間にとって眞実であるものは、他人にとっても眞実だからである。

人の心をひくために、しかめっつらをしたり、みょうな身ぶりをしてはならない。

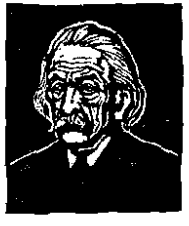
すなおなれ。

——ロダン——

私には、あなたがた日本の小学校のみなさんに、このあいさつを送るだけの特別の権利があると信じます。といいますのは、私は、あの美しいあなたがたのお國を親しくおたずねして、町や、家や森や、山をながめたり、また、そうした風景から、自分の國を愛するということを学んでいる日本の子どもさんたちにも、お目にかかったことがあるからです。

私のつくえの上には、日本のみなさんが書いたあつい絵の本が、いつもおかれてあります。

歴史の上で、いろいろな國の人々の間に、友だちとして心のかよったおつきあいができるようになったのは、われわれが最初であります。それ以前は、おたがいに他の國々のことはわからず、世をすごしてきたばかりでなく、実際は、たがいににくみあったり、おそれあったりしてきました。



友愛の精神が、もっともっとひろがっていきますように。そう思いながら、年よりの私は、日本の小学校のみなさんに、はるかなあいさつを送り、あなたがたの時代がきたときには、私たちの時代がはずかしく思われるようになることをいのります。

——アインシュタイン——

天は、人のうえに人をつくらず、人のしたに人をつくらず。

——福沢諭吉——

いだいなれよ。

平ぼんなれよ。

平ぼんにしていだいなれよ。

空氣または日光のごとく

平ぼんなれよ。

——内村鑑三——

とおっしゃった。

うれしいような、楽しいような、悲しいような氣持をだいて、この日記のふでをおこう。

——高橋——

——高橋さんが、きょうの日記当番ですが、私にも書かせてください。きょうの感謝会はわすれることはできません——

先生がたがみんなで、合唱してくださった校歌や、石井先生の手品や、森田先生と西野先生のバイオリンとピアノ合そうなど、はじめてのことなので、ほんとうにうれしく思いました。なぜいままで、もっと先生がたとしたしくしなかったのだろうと、ざんねんに思いました。先生がたのご幸福をおいのりいたします。

——園山——

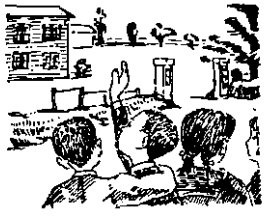
楽しい六か年の思い出を残してくれたとの運動場、この校舎、あの農園、みんなありがとう。

——田中——

なつかしい一年生。「こくご　一」の第一課「みんないい　こ。」ほんとうにみんないい同級生であった。

「心に花をかざれ。」

——丸山——



○

新しい旅の門出、
希望をもって。
校門のかしの木よ、
母校よ、ばんざい。

——草野——

末残板置府氷河起殺刀必
初綿周囲投特側訓㊀仁在
標準焼技研究諸各衛刊恩
爭費測寄宿授当境権栄要
健康潔底

○でつつんだ漢字は、「当用漢字別表」（教育漢字）にはいっていない漢字です。

36

まことさん　はなこさん
いなかの　いちにち
いさむさんのうち

文部省

凡例

一、本書は文部省著作、昭和二十四年に発行された版本によった。

一、本書の「まことさん　はなこさん」「いなかのいちにち」は全巻を凸版とし、原本の四頁分を本書の一頁におさめた。

一、さし絵は「いさむさんのうち」の一部の他はすべて色刷となっているが、本書ではすべて黒で印刷した。色刷は口絵参照。

一、本書の「いさむさんのうち」は原本の文字を二段組とした。原本のさし絵はすべて縮小して本文の近いところに入れた。

一、文字、表記法、巻末の「あたらしいことば」はすべて原本のまゝに入れた。字体はなるべく本文に近い活字を用いた。

まことさん
はなこさん

まことさん　はなこさん

はなこさん

まことさん

37

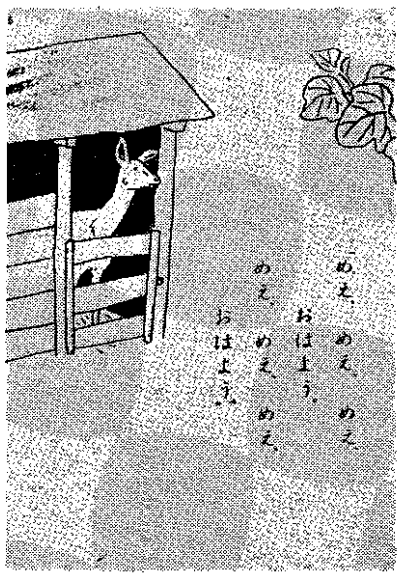
いなかの　いちにち

いなかの
いちにち

よが　あけた。
ごけこっこう。
よが　あけた。
ごけこっこう。
よが　あけた。

かあ、かあ、かあ、
よが　あけた。
かあ、かあ、かあ、
よが　あけた。

ちゅん、ちゅん、ちゅん、
おはよう。
ちゅん、ちゅん、ちゅん、
おはよう。

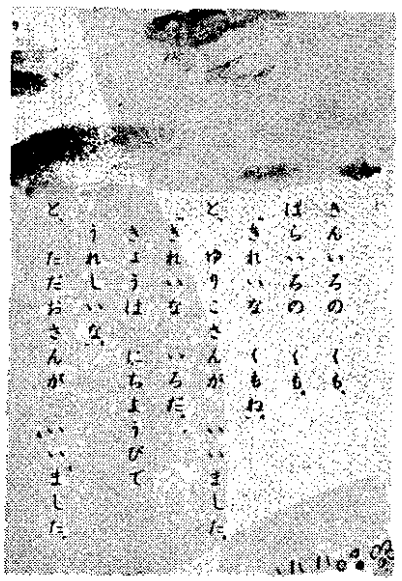

めえ、めえ、めえ、
おはよう。
めえ、めえ、めえ、
おはよう。

おきました
ただおさんが
おきました。
ゆりこさんも
おきました。

ふたりは
かおを　あらいました。

38

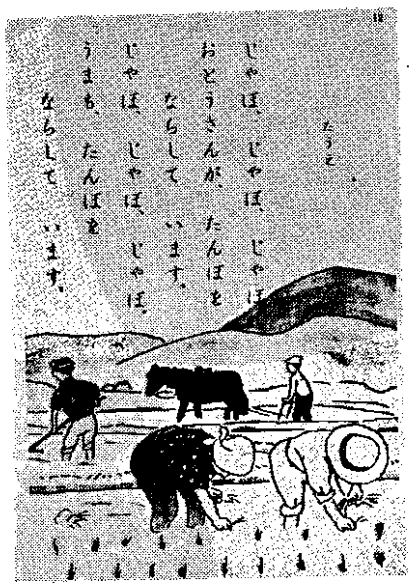
あさの　ーー



きんいろの　くも。
ばらいろの　くも。
きれいな　くもね。
と、ゆりこさんが　いいました。
きれいな　いろだ。
きょうは　にちようびで
うれしいな。
と、ただおさんが　いいました。

あさの　くつだ。
ただおさんは、
やぎを　こやから　だしました。
めえ　めえ。
ただおさん　ありがとう。
ゆりこさんは、
うさぎに　えさを　やりました。
くく　くく。
ゆりこさん　ありがとう。

にいさんは、
まぐさを　きって　います。
ただおさんは、
きった　まぐさを
うまに　やります。
ひひん、ひひん。
ごちそうさま。



たうえ。
じゃぼ、じゃぼ、じゃぼ。
おとうさんが、たんぼを
ならして　います。
じゃぼ、じゃぼ、じゃぼ。
うまも、たんぼを
ならして　います。

おかあさんが、
たうえを　して　います。
にいさんも、
たうえを　して　います。
あちらでも、
こちらでも、
たうえを　して　います。

つばめ
すいすい　すいすい。
とんで　くる。
つばめが　ひく　く
とんで　くる。
ひらり、ひらり、
とんで　いく。

ちゅうがえり　して
とんで　いく。

39

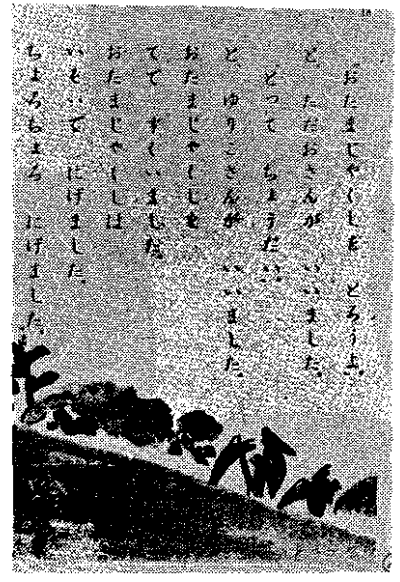
おべんとう

おばあさんが、
みんなの　おべんとうを
こしらえました。
ただおさんが
おべんとうを　もちました。
ゆりこさんが
やかんを　もちました。

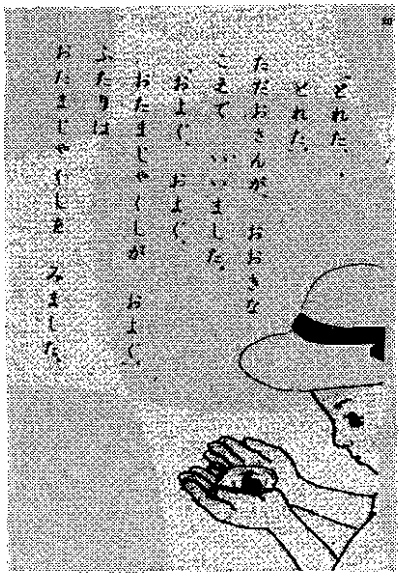
ちちゅう

ちちゅうで、
おたまじゃくしを
みつけました。
おたまじゃくしが
たくさん　いるよ、
にいさん、
と、ゆりこさんが
いました。

おたまじゃくしを　とろうよ、
と、ただおさんが　いいました。
とって　もって　いこう、
と、ゆりこさんが　いいました。
おたまじゃくしは
すぐ　いきもの、
おたまじゃくしは
いそいで　にげました。
ちょろちょろ　にげました。



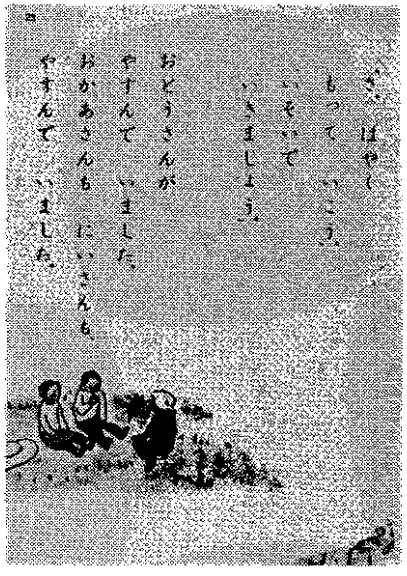
どれ、
どれ、
ただおさんが、おおきな
こえで　いいました。
およぐ、およぐ、
おたまじゃくしが　およぐ、
ふたりは
おたまじゃくしを　みました。



くろしそうだね、
と、ただおさんが　いいました。
にがしましょうか、
にがそうか、
おたまじゃくしは　にげました。
ちょろちょろ
にげました。

おや、
もう、
おひるに　なった。
と、ただおさんが
いいました。
みんな　おなが
すいて　いるでしょう、
と、ゆりこさんが　いいました。

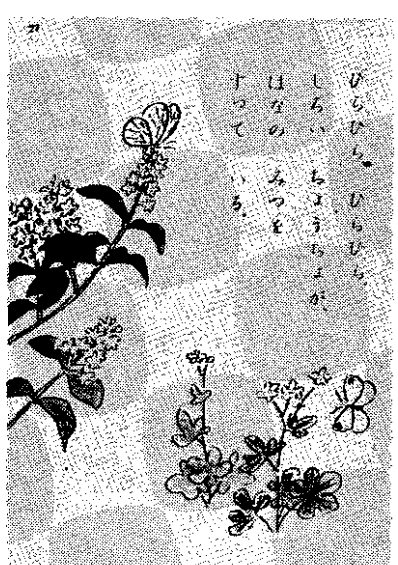
さ、はやく
もって　いこう、
そして
いきましょう。
おとうさんが
やすんで　いました。
おかあさんも　にいさんも
やすんで　いました。



40

おそく　なって　すみません。
どうして　おそく　なったの。
と、おとうさんが　いました。
「おたまじゃくしを　とって
あそんで　いたの。
と、ただおさんが　いました。
おもかつたでしょう。
ごくろうさん。
と、おかあさんが　いました。

おいしい、おいしい
おべんとう。
たのしい、たのしい
おべんとう。
そらには　ひばりが
ないて　いる。
ぴいちく　ぴいちく
ないて　いる。



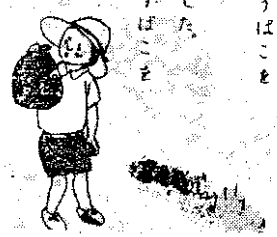
みつばち　ちょうちょ

ぶんぶん、ぶんぶん、
みつばちが、
はなの　みつを
すって　いる。

ひらひら、ひらひら、
しろい　ちょうちょが、
はなの　みつを
すって　いる。

ゆるく　なった

おいしい　おべんとうを　たべました。
「ただおさん、おべんとうばこを
もって　おかえり。
と、にいさんが　いいました。
ただおさんは　おべんとうばこを
もちました。
「あ、かるく　なった。
「ゆりこさんは、



やかんを　もって　おかえり。
と　おかあさんが　いいました。
ゆりこさんは　やかんを　もちました。
あ、かるく　なった。

みずぐるま

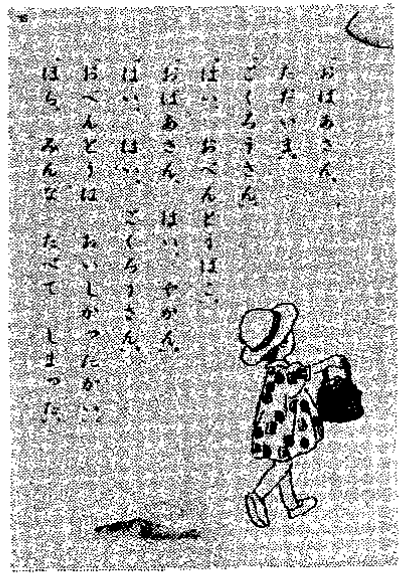
ふたりは、
どての　みちを
かえりました。
「みずぐるまは、
どうして　まわるの、
と、ゆりこさんが　ききました。
「みずの　ちからで

まわるのさ。
と、ただおさんが　いいました。
「みずは　どこから　くるの。
「あの　やまから　くるのさ。
「みずぐるまは、ぐるぐる
まわって　なにを　するの。
「おこめを
つくんだよ。

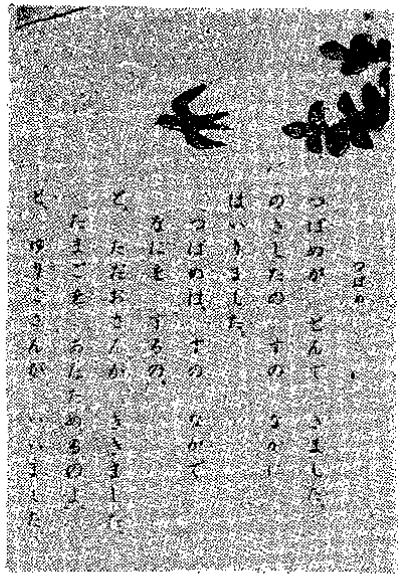
ふるい、おおきな
みずぐるま。
ぐるぐるぐるぐる
まわる
みずぐるま。
あさから　ばんまで
ぐるぐる　まわり、
はたらく　はたら
みずぐるま。

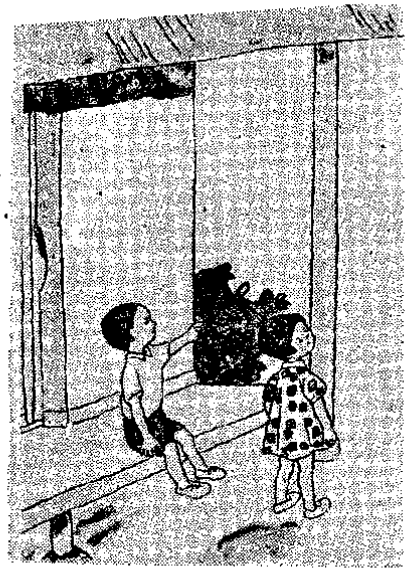
おばあさん。

おばあさん、
たたいえ、
ごくろうさん。
はい、おべんとうはこ。
おばあさん、はい、やかん。
はい、はい、ごくろうさん。
おべんとうは　おいしかったかい。
はら　みんな　たべて
しまった。



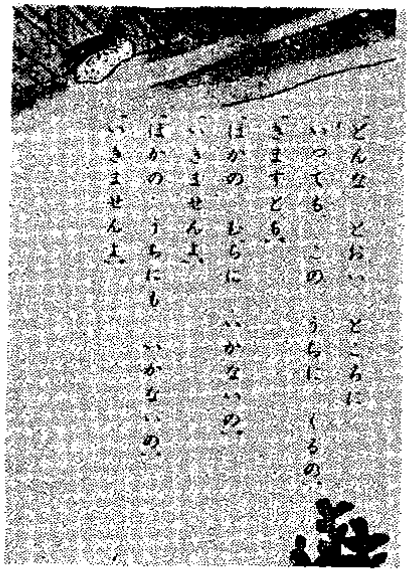
つは。
つばめが　とんで　きました。
のきしたの　すの　なかに
はいりました。
つばめは、すの　なかで
なにを　するの。
と、たずねおさんが　ききました。
たまごを　うんだ　ためのよ。
と、やすこさんが　いいました。





おばあさん、あの　つばめ、
どこから　きたの。
とおい、とおい　みなみの　ほうから
きたのよ。
ことしねんも　ここに　すを
かけましたね。
もうね、ことしねんと　おなじ
おなじ　つばめなの。
つばめですよ。

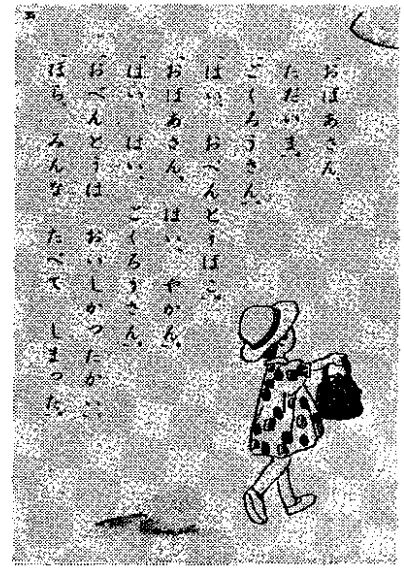
どんな　とおい　どこに
いっても　このうちに　くるの。
きますとも。
ほかの　むらに
いかないの。
いきませんよ。
ほかの　うちにも
いかないの。
いきませんよ。



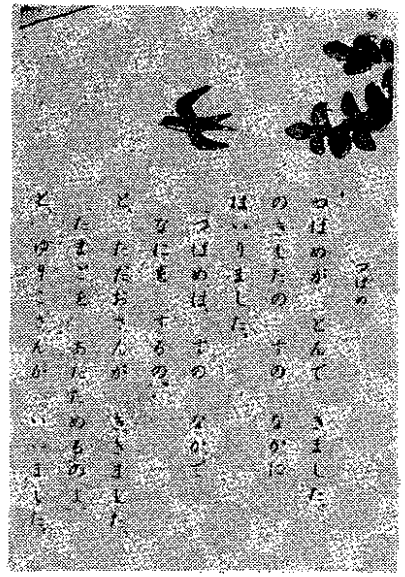
42

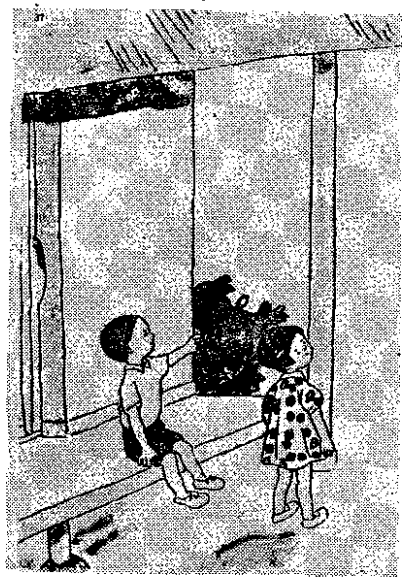
ふるい　おおきな
みずくるま。
くるくる　まわる
みずくるま。
あさから　ばんまで
ぐるぐる　まわり、
はたらく　はたらく
みずくるま

おばあさん、
ただいま。
ごくろうさん。
おべんとうは。
はい、おばあさん。
はい、はい、ごくろうさん。
おべんとうは　おいしかったか。
ほら、みんな
たべて　しまった。



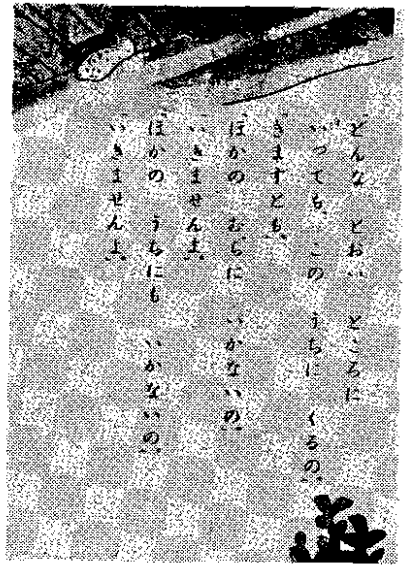
つばめ。
つばめが　とんで　きました。
のきたの　すの　なかに
ぱいりました。
つばめは　すの　なかで
なにを　する　の。
ただ　おさんが　もちました。
たまごを　あたため　ものよ。
どう　ぞ　こんが　いい　ました。





おばあさん、あの　つばめ、
どこから　きたの。
とおい　とおい　みなみの　ほうから
きたの　よ。
きょねんも　ここに　すを
かけました　ね。
そう　ね。きょねんと　わなじ　つばめよ。
おなじ　つばめ　なの。
おなじ　つばめ　です　よ。

どんな　とおい　ところに
いって　も　この　うちに　くる　の。
きます　とも。
ぼかの　むらに　いかない　の。
こ　きます　よ。
ぼかの　うちにも　いかない　の。
いきます　よ。



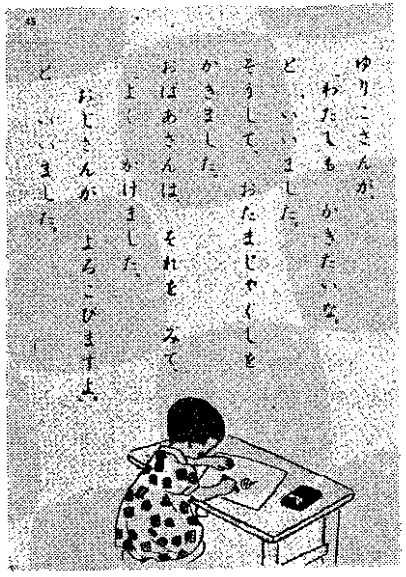
ゆうびんを　はこぶ　おじさんが　きました。
はい、ゆうびん。
といって　はがきを　おいて　いきました。
おばあさんが　おじさんから　ただおに　きましたよ。
といいました。

おばあさんが　はがきを　よみました。
ちいさくん　ちゃんと　なって　うれしいね。
なんと　いって　いました。

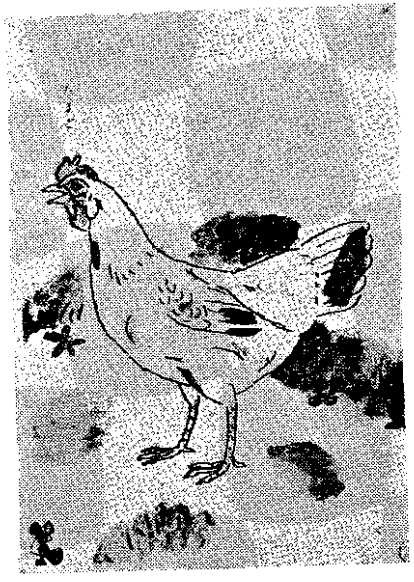
うちでは、
みんな　じょうぶだ。
こうしが　うまれたよ。
「くろこ」と　なを　つけた。
これが　「くろ」だよ。

ただおさん、
えを　かいて、
おじさんに　ごへんじを　あげなさい。
と、おばあさんが　いいました。
ただおさんは　えを　かきました。
やぎを　かきました。
うさぎも　かきました。
くれよんで　いろを　ぬりました。

ゆりこさんが、
わたしも　かきたいな。
といいました。
そうして　おたまじゃくしを　かきました。
おばあさんは　それを　みて、
よく　かけました。
おじさんが　よろこびますよ。
といいました。



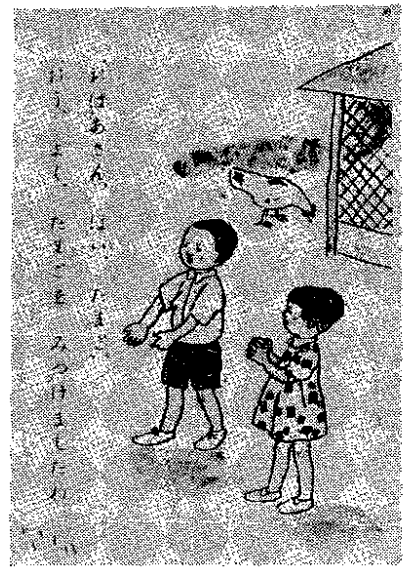
めんどりが　なきました。
こけっこっこ、こけっこっこ、
めんどりは　たまごの　そばから　はなれて、
こけっこっこ、こけっこっこ。
たまごは　みつかりません。
といって　なきました。



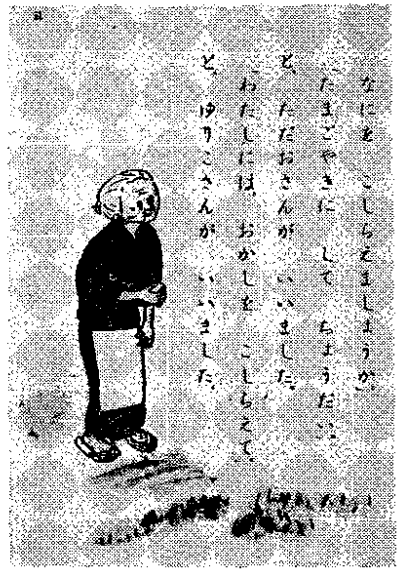
44

ゆりこさんが　とりごやを
さがしました。
わたしの　なかに　たまごが
ありました。
ごめんどりさん、
みつけましたよ。
これ、これ、ありましたよ。
と、みて　ゆりこさんが　たまごを
とりあげました。

こけっこっこ、どうどう
みつけられた。
と、めんどりが　いいました。



おばあさん、はい、なまごを
おうち、まし、たまごを　みつけましたよ。



なにを　こしらえましょうか。
たまごやきに　して　ちょうだい。
と、ただおさんが　いいました。
わたしに　は、おかしを　こしらえて
と、ゆりこさんが　いいました。

うさぎ、
うさぎが　こやから　にげました。
ただおさんが　おいかけました。
ゆりこさんも　おいかけました。
うさぎは　ぴょんぴょん　にげます。

ただおさんは　まえから　ちかよりました。
ゆりこさんは　うしろから　ちかよりました。
ふたりは　いっしょに　つかまえました。

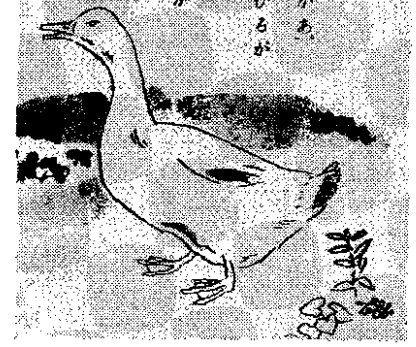
わたしが　つかまえたのよ。
ぼくが　つかまえたんだよ。
いや、わたしよ。
いっしょだね。
うさぎを　こやに　いれました。
わるい　うさぎさんね。
と、ゆりこさんが　いいました。
もう　にげては　いけないよ。

と、ただおさんが　いいました。

45

あひる

があ、があ、があ。
となりの　あひるが
きましたよ。
と、ゆりこさんが
いいました。
うちの
にわとりと

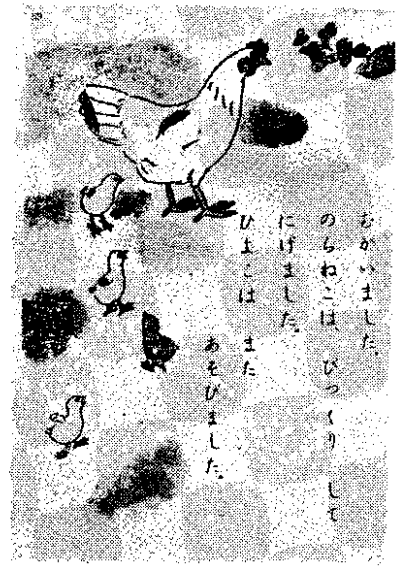


なかよしだね。
ど、ただおさんが　いいました。
があ、があ、ここ、ここ、
があ、があ、ここ、ここ、
なに　おはなしして　いるの。
があ、があ。
ここごえは
わからないね。

のらねこ

のらねこが　きました。
あひるは　にげました。
おやどりは、
ここ、ここ、
と　いって、ひよこを
あつめました。
おやどりは　のらねこに

むかいました。
のらねこは　びっくり　して
にげました。
ひよこは　また
あそびました。



ゆうやけ

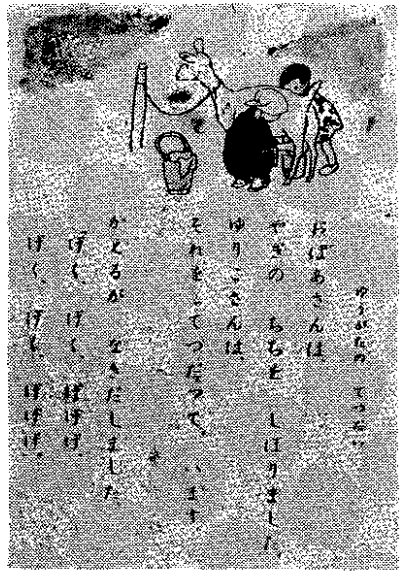
ゆうがたに　なりました。
きんいろの　くも。
ばらいろの　くも。
ゆうやけ、こやけ、
あした　てんきに　なあれ。
ただおさんと　ゆりこさんと、
ふたりで　うたいました。
たんぼに　くもが　うつります。

ただおさんは　しばを　はこんで　います。
ゆりこさんは　ひを　ふいて　います。
ぼちぼち、
ぼちぼち、
ひが　もえろ、
おぶろ、
わけ　わけ、
ひが　もえろ。

おばあさん

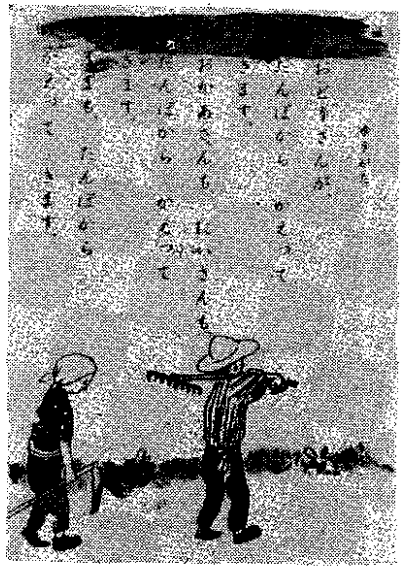
おばあさんが　おふろを　わかして　います。

46



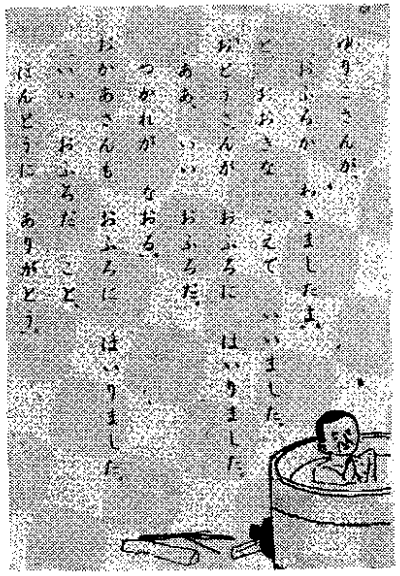
やまだの　てつこさん
おばあさんは　ぞうきの　ちちを　しぼりました。
ゆりこさんは　それを　ぞうきに　つかって　います。
かえるが　なんだと　しました。
げく　げく　ばけ　ばけ　げく　げく　げげ　げげ　げげ。

たたおさんは　やぎを　こやに　いれました。
にわとりも　あつめて　こやに　いれました。
いちばんぼし　みつけた。
にばんぼし　みつけた。



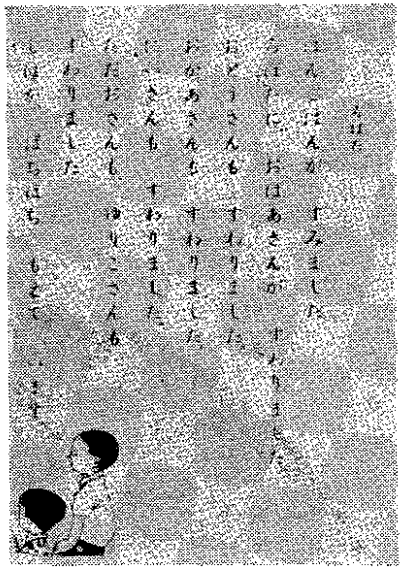
ゆうやけ　こやけ
たたおさんが　ぞうきんを　ぶらぶら　ぶらさげて　きます。
おばあさんも　にわから　かえって　きます。
たんぼから　たんぼから　かえって　きます。

みんな　つかれて　おなかが　すいて　います。



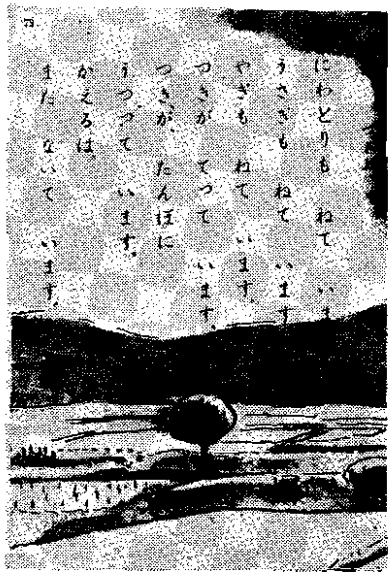
ゆりこさんが　おふろが　わきました　よ。
たたおさん　どうぞ　おはいり　なさい。
おばあさんが　おふろに　はいりました。
ああ　いい　つかれが　なおる。
おかあさんも　おふろに　はいりました。
いい　おふろだ　こと。
ばんとうに　ありがとう。

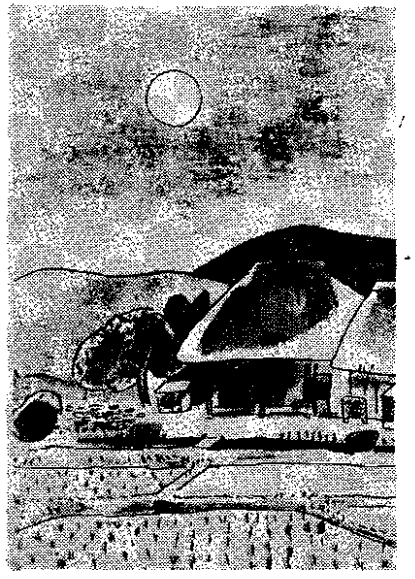
にいさんは　うまの　からだを　あらって　います。
にいさんも　おふろに　はいりました。
みんな　かわるが　わる　おふろに　はいりました。



ばんごはんが　すみました。
おばあさんが　すわりました。
おじいさんも　すわりました。
おかあさんも　すわりました。
たたおさんも　すわりました。
ゆりこさんも　すわりました。
ばん　ばん　ばん　ばん　ばん　ばん　ばん　ばん。

おばあさんが　むかしばなしを　はじめました。
むかし　むかし。
とは　はなしました。
たたおさんも　ゆりこさんも　にこにこ　して　きいて　います。
みんなの　ひかり　かおを　てらします。





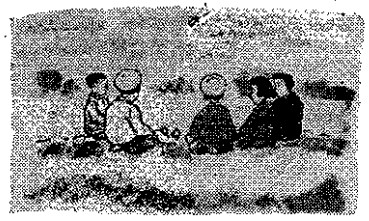
55 ——
56 あひる
　があ
　となり
　にわとり
57 なかよし
　おはなし
　わかる—わから(ない)
58 のらねこ
　おやどり
　ひよこ
　あつめる
　　—あつめ(ました)
59 むかう
　　—むかい(ました)
　びっくり
　また(又)
60 ——
61 ゆうやけ
　ゆうがた
　こやけ
　あした
　てんき
　なあれ
　うたう
　　—うたい(ました)
　うつる—うつり(ます)
62 おふろ
　わかす—わかし(て)
63 しば
　ひ(火)
　ふく—ふい(て)
　ぱちぱち
　もえる
　わく—わけ
64 ちち
　しぼる
　　—しぼり(ました)
　かえる(動物の名)
　なきだす
　　—なきだし(ました)
　げく
　げげげ
65 いちばんぼし
　にばんぼし
66 ——
67 つかれる—つかれ(て)
68 ああ(感)
　いい
　つかれ
　なおる
　(いい　おふろだ)こと
　ほんとうだ
　　—ほんとうに
69 からだ
　かわるがわる
70 ろばた
　ばんごはん
　すむ—すみ(ました)
　すわる
　　—すわり(ました)
71 むかしばなし
　はじめる
　　—はじめ(ました)
　むかし
　はなす
　　—はなし(ました)(話)
　にこにこ
　ろ(炉)
　てらす…てらし(ます)
72 ——
73 つきよ
　ねる—ね(て)
　つき
　てる—てっ(て)
　まだ

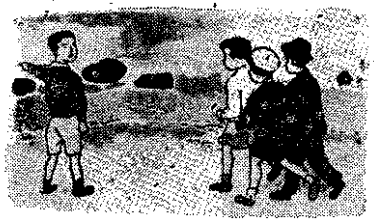
20 とれる—とれ(た)
　こえ
　およぐ
21 くるしい
　　—くるし(そうだ)
　(くるし)そうだ
　にがす
　　—にがし(ましょう)
22 おひる
　あ(感)
　もう
　なる—なっ(た)
　おなか
　すく—すい(て)
　(いる)でしょう
23 さ(感)
　はやい—はやく
　やすむ—やすん(で)
24 おそい—おそく
　すみません
　どうして
　おもしろい
　　—おもしろかっ(た)
　ごくろうさん
25 おいしい
　たのしい
　そら
　ひばり
　なく—ない(て)
　ぴいちく
26 みつばち
　ちょうちょ
　ぶんぶん
　みつ
　すう—すっ(て)
27 ひらひら
28 かるい—かるく
　たべる
　　—たべ(ました)
　おべんとうばこ
29 ——
30 みずぐるま
　どて
　みち
　かえる
　　—かえり(ました)
　まわる
　きく—きき(ました)
　みず
　ちから
31 どこ
　あの
　やま
　ぐるぐる
　おこめ
　つく—つく(んだ)
32 ふるい
　ばん
　まで(助)
　はたらく
33 ——
34 ——
35 (おいしかった)かい
　ほら(感)
　しまう—しまっ(た)
36 のきした
　す(巣)
　なか
　はいる
　　—はいり(ました)
　たまご
　あたためる
37 ——
38 とおい
　みなみ
　ほう(方)
　きょねん
　ここ
　かける—かけ(ました)
　そう
　おなじ
39 どんな
　ところ
　でも(助)
　この
　うち
　とも(助)
　ほか
　むら
　(いか)ない
　(いき)ません
40 はがき
　ゆうびん
　はこぶ
　おじさん
　おく—おい(て)
41 ——
42 よむ—よみ(ました)
　(ただお)くん
　いちねん
　なん(と)
43 じょうぶだ
　こうし
　うまれる—うまれ(た)
　くろ
　な(名)
　つける—つけ(た)
　これ
44 え(絵)
　かく—かい(て)
　ごへんじ
　あげる—あげ(なさい)
　くれよん
　ぬる—ぬり(ました)
45 わたし
　(かき)たい
　そうして
　それ
　よい—よく
　かける—かけ(ました)
　よろこぶ
　　—よろこび(ます)
46 ——
47 めんどり
　こけっこっこ
　そば
　はなれる—はなれ(て)
　みつかる
　　—みつかり(ません)
48 とりごや
　さがす
　　—さがし(ました)
　わら
　ある—あり(ました)
　とりあげる
　　—とりあげ(ました)
49 とうとう
　られる—られ(た)
50 おう(感)
51 たまごやき
　おかし
52 おいかける
　　—おいかけ(ました)
　ぴょんぴょん
53 まえ
　ちかよる
　　—ちかより(ました)
　うしろ
　いっしょ
　つかまえる
　　—つかまえ(ました)
54 ぼく
　いや
　いれる—いれ(ました)
　わるい
　いけない

あたらしい　ことば

2 よ(夜)
あける—あけ(た)
(あけ)た
こけこっこう
3 かあ
4 ちゃん
5 めえ
6 おきる—おき(ました)
ただお(さん)
ゆりこ(さん)
7 ふたり
かお
あらう
—あらい(ました)
8 あさ
9 きんいろ
ばらいろ
ね(助)
と(助)
いう—いい(ました)
いろ
(いろ)だ
きょう
にちようび
うれしい
(うれしい)な
10 てつだい
やぎ
こや
から(助)
だす—だし(ました)
ありがとう
うさぎ
えさ
やる—やり(ました)
くくく
11 にいさん
まぐさ
きる—きっ(て)
うま
ひひん
ごちそうさま
12 たうえ
じゃぼ
たんぼ
ならす—ならし(て)
13 あちら
こちら
14 つばめ
すいすい
とぶ—とん(で)
ひくい—ひくく
ひらり
15 ちゅうがえり
16 おべんとう
おばあさん
こしらえる
—こしらえ(ました)
もつ—もち(ました)
やかん
17 おたまじゃくし
とちゅう
みつける
—みつけ(ました)
たくさん
よ(助)
18 とる—とろ(う)
(とろ)う
ちょうだい
て(手)
すくう
—すくい(ました)
いそいで
にげる—にげ(ました)
ちょろちょろ
19 ——

49





いさむさんの　うち

もくじ

一　いさむさんの　うち
二　なかよし
三　かいもの
四　えんそく
五　おばさんの　うち
六　どうぶつえん
七　いつつの　とびら
八　おはなしかい
九　かみしばい

いさむさんの　うち

うちの　人たち

おばあさん。
おとうさん。
おかあさん。
ねえさん。
いさむさん。
けんちゃん。